琉球大学学術リポジトリ

ノート：スミス蔵書 著者略傳資料 3

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄, スミス／帝国主義 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38457

矢内原忠雄文庫

史　料　名	スミス蔵書 著者略傳資料 3
封筒番号	582
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 28 日
撮　影　者	富士写真フイルム　株式会社
備　　考	

矢内原忠雄文庫

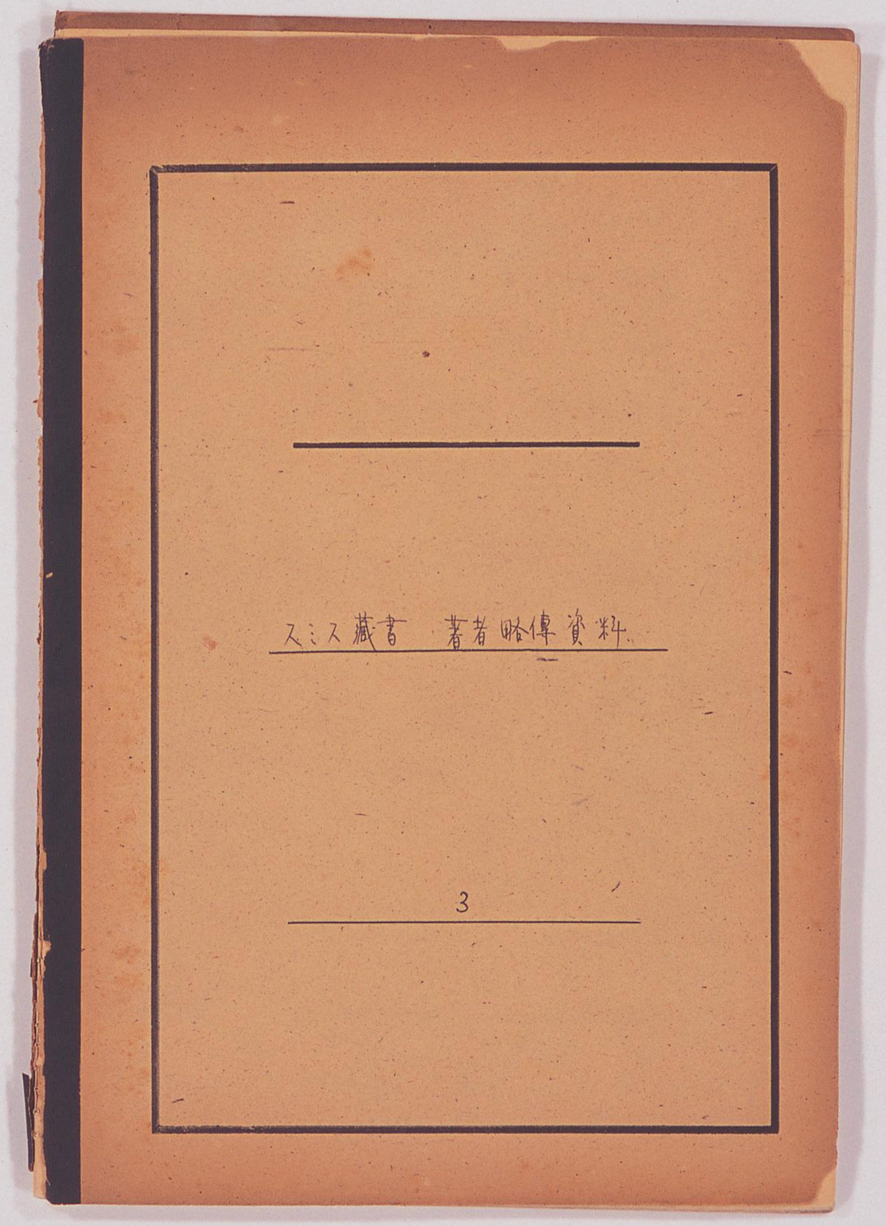
封筒番号： 582

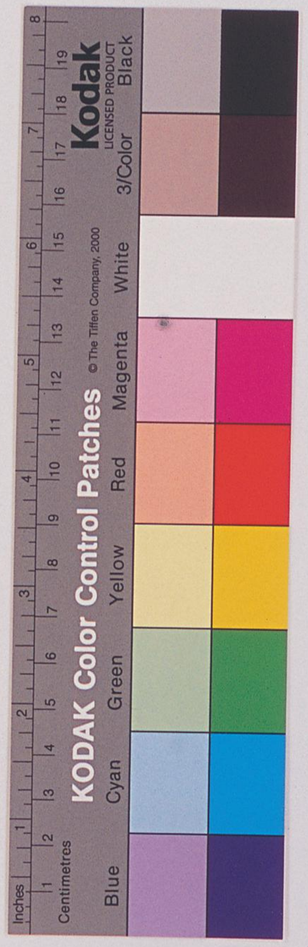
史料名	スミス蔵書 著者略傳資料 3
資料形態	B5版ノート
枚　数	32+24
頁　数	112
縦（cm）	25.7
横（cm）	18.2
厚さ(cm)	
書誌的事項	スミス／帝国主義 挟み込みノート、24枚。表紙が取れている。 今泉分類記号： Y

琉球大学附属図書館

説明
ターゲット

この原本は、破損のまま撮影します。





1／12

41. Defoe, Daniel, 1661? — 1731.

英国のジャーナリスト・小説家。ロンドンの肉屋 James Foe の子，Defoe と改姓したのは 1703年頃．1684年に結婚したが当時メリヤス商を営んで居り、既に大陸諸国に旅行して来たらしい。1685年の Monmouth の叛乱に参加したが幸うにて處刑を免れ、1688年には William Ⅲ の軍に投じた。The True-born Englishman (1701) という散文に近い諷刺詩は、外国生れの国王に対する一般の偏見を攻撃したもの。小冊子 The Shortest way with the Dissenters (1702) は自ら非国教徒の作者が、わざと非国教徒の絶対抑圧を主張して、宗教上の偏狭の愚を諷したもの。この後者が当局の忌諱に觸れて監禁の刑に處せられた。a Hymn to the Pillory (1703) はその体験から生れた擬 Pindar 風の頌である。1704年に個人で創めた週刊紙 a Review は、後に週二回，更に三回の發行となり、1713年まで續いた。1705年に著した a True Relation of the Apparition of one Mrs. Veal は報告文の形式を採った好箇の短篇。其後の数年間は政治家の Harley や Godolphin の手先に雇はれて、スコットランド併合問題に盡力した。彼のこの政治的活動の絶頂期の立著は A History of the Union (1709) である。1712—3年頃の反 Jacobite の小冊子が禍して再び入獄の憂目を見たが、出獄するや直ちに 1713年 The Review の代りに Mercator という商業新聞を始めた。小説家としての彼の生涯は、五十八才の時の作 The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe (1719) をもって始まる。同じ年に續篇 The Farther Adventures of Robinson Crusoe が出た。この両者を合せて一般に Robinson Crusoe という。翌 1720年には Serious Reflections

... of Robinson Crusoe, Duncan Campbell, Captain Singleton, Memoirs of a Cavalier の四篇を著し、續いて Moll Flanders, a Journal of the Plague Year, Colonel Jacque の三篇を 1722年に Roxana 及び旅行記 A Tour thro' the Whole Island of Great Britain (1726年完結) 等を1724年、といふ工合に注目すべき著述を世に送つた。その後の作の中主なものは Jonathan Wild (1725), a New Voyage round the World (1725), 彼自身の商業上の經驗談 The Complete English Tradesman (1725—7), a Plan of English Commerce (1728), The Complete English Gentleman (1890) 等がある。上記の諸作の外、彼の筆になる小冊子は夥しい數に上り、彼の著作は合計二百五十以上に及ぶといはれる。しかしその名声は唯一篇の寫實小説 Robinson Crusoe に懸つてゐる。この傑作を發表して後は經濟的にも恵まれた生活をしてゐたが、晩年には何か家庭的不祥事があつたらしく、出奔して旅の宿でその多忙な生涯を終つた。 (英米文學辭典)

42. Diderot, Denis, 1713—1784.

French man of letters and encyclopaedist.
Langres で生れ、Jesuits によって教育された。
教育を受け終へるや Paris で文士の仲間に投じて父を怒らせた。
英国で文学仲間が Johnson の周囲に集ってゐた頃、フランスでは D'Holbach 男爵家に毎週集って Diderot の縦横の警句や生々した熱弁をきく仲間があった。彼は great writer ではなく、fertile, suggestive and daring thinker であり、又 prodigious and most eloquent talker であった。
初期の著作には重要なものはない。
彼を独創的な思想家として世に出した最初の作は、有名な Lettre sur les aveugles (1749) で、彼はこれによって、人間の ideas が五感に依存する事を説き、更に Lettre sur les sourds et muets を著した。この二著の哲学的意義は Relativity の原理への前進にある。「盲人論」には variability や survival by superior adaptation の如き modern theory が、未だ消化されない形ではあるが明瞭に提示されて居て興味あり、又、盲人に触覚で読むことを教へる事の可能性が暗示されてゐたりして、彼が如何なる主題に対しても comprehensive freedom をもって探究した事を示してゐる。この書によって彼は多くの崇拝者を得たが、authorities からは危険と見られ3ヶ月獄に投ぜられた。
書肆 Lebreton が Ephraim Chambers の Cyclopaedia の仏訳を計画して Diderot に依頼した。単なる翻訳の代りに、彼は、当時の知識階級に深い影響を与へてゐたすべての active writers, new ideas 及び new knowledge の網羅を企図し、熱心以て本屋を動かし、D'alembert を

フランスの哲学者・劇作家・批評家。「百科辞典」の編纂者として知られてゐる。著作も多方面にわたり、啓蒙思想家として旧思想打破に力があった。主著は感傷的喜劇 Le Fils naturel (「私生児」1757), Le Père de famille (「家族の父親」1758), 劇批評 La Poésie Dramatique (劇詩論), 文学、教育その他に関して Le Neveu de Rameau (「ラモーの甥」1773), 小説 La Religieuse (「婦人修道者」1760), Jacques le Fataliste (「宿命論者ジャック」1773), 哲学 Lettre sur les Aveugles (「盲人論」1740), Entretien d'un philosophe avec la maréchale de ——. (「哲学者と某元帥夫人との対話」1777), Le Rêve de d'Alembert (「ダランベールの夢」1769—1830) 等。
(英米文学辞典)

colleague に得、政府の許可を得て、1750年精緻な趣意書を発表し、翌年第一巻を発行した。本文は1765年で出版を終へたが plates の巻の発行は1772年までかゝつた。その20年間、Diderot は仕事の苦労のみならず、教会その他の敵の迫害、陰謀に悩まされ、友人に見捨てられて苦しんだ。subscribers は急速に増して行つた。justice of religious tolerance や speculative freedom を当然の事とし、政治は common people を主な対象として行はるべしとの democratic doctrine を明かに主張し、又終始一貫 scientific knowledge と pacific industry を高揚するこの Encyclopaedia は、旧いフランスの支配階級にとつて odious なものであつた。第七巻に D'alembert の筆による "Geneva" の項が載せられ、時あたかも Helvétius 著 L'Esprit が現れて、the ecclesiastical party に深刻なショックを與へた。1759年 the Encyclopaedia は形式上発禁された。しかし仕事は当局の眼をのがれ以前に増す困難の中で続行された（中でも D'Alembert その他の有力な colleagues が手をひいた事、及び完成間際になつて、bookseller が政府をおそれて勝手な削除をして、彼のこの二十年間の労作を取り返し様もなく損つてしまつたのを発見した事は、Diderot にとり非常な打撃であつた）。

著作は各分野に亙り new and fruitful ideas を供給してゐる。その中に傑作はないが、傑作を生むべき thoughts があり、創作はないが創作を inspire し direct する様な批評がある。劇 Le Fils naturel (1757) や Le Père de famille (1758) は見るべき作品でないが、彼はそれと同時に Paradoxe sur le comédien 等の劇評論を書き、フランス古典劇の誇張的な conventions に対して実生活に即した serious, domestic, bourgeois drama の principles を唱へた。彼が

Lessing に與へた影響は決定的のものであった。絵画に於ける彼の批評は広範囲に豊かで、freshness と reality と life に富み、Sainte-Beuve の言う如く、'フランス人を一つの新しい sentiment に引き入れ、人々に色彩の mystery と purport を始めて知らしめた'。Encyclopaedia の 'Beauty' の項は、彼の造詣の深さを示し、Essai sur la peinture を Goethe は '画家よりも詩人を一層喜ぶ magnificent work' と評してゐる。

Jacques le fataliste (書かれたのは 1773年 発行は 1796年) は興味な作品。Le Neveu de Rameau は curious literary flavour をもった作品で 強いて云へば Diderot の masterpiece と云ふべきもの。ヨーロッパに知られたのは Goethe の訳による。

miscellaneous pieces は Le Rêve de D'Alembert その他非常な数に上る。'彼の時代のすべての矛盾が彼の中で互にたたかってゐた' と云はるべき philosopher で dogma も unity も持たなかった。(Rosenkranz) 假設を捉へて結論を推し進めてゆく彼のやり方は materialist doctrines を鼓吹し、彼自身も、無神論のバイブルと云はれた D'Holbach の Système de la nature に多くの declamatory pages を寄與してゐる。

彼の著作の入念に編纂された全集 (20巻) は 1875—1877年に完成された (MM. Assézat and Tourneux 監輯)

(E.B.)

43. Dryden, John, 1631 — 1700.

英国の詩人・劇作家・批評家。Northamptonshire に生れ、Westminster 及び Cambridge に学び、1657年ロンドンに出た。1659年 a Poem upon the Death of His Late Highness, Oliver, Lord Protector を出版して Cromwell に対する哀悼と賞讃の声を挙げたが、王政復古となるや直に王党に変じて、Charles II を正義の女神に擬へた Astræa Redux (「帰れる星姫」1660) と To His Sacred Majesty, a Panegyrick on His Coronation (1661) とを公にし、後年 Johnson にその無節操を非難された。1665年ロンドンに疫病流行の際には Charlton に避難したが、帰来、Annus mirabilis: The Year of Wonders, 1666 (1667) を発表。この十音節四行聯三百四からなる彼の初期の傑作には、奔放な形容と奇想とを以て読者を魅する個所は少くないが、詩人としての彼の真面目は heroic couplet を用ひて辯論の器とし、又は寸鉄人を刺す諷刺を巧にした点にあるだらう。この種の作には The Medal (1682) や Mac Flecknoe (1682) があるが、就中有名なのは政治的諷刺詩の上乗と称せられ、Johnson も大いに賞讃した Absalom and Achitophel (1681－2) である。これは当時の王位継承の紛争に於て、一方の擁立を主張者たる James II の庶子 Duke of Monmouth と、彼を擁立せんとして敗れた Earl of Shaftesbury とを、(旧約聖書「サムエル後書」中の名を借りて) 夫々 Absalom と Achitophel として、彼等に対する冷嘲を壇にしたものである。信仰を同題にした二つの長詩 Religio Laici (「俗人の宗教」1682) 及び The Hind and the Panther (1687) には、作者の強大な知力が最もよく顕れて居り、すぐれた個所も少くない。抒情詩に於ては、a Song for St.

Cecilia's Day (1687), Alexander's Feast ; . . . An Ode in Honour of St. Cecilia's Day (1697) 及び To the Pious memory of . . . Mrs. Anne Killigrew など、彼の代表作の他には、劇の中に挿入した若干の歌謡にみるべきものがあるに過ぎない。劇壇に於ても彼は大立物であって、その作は当時行はれたあらゆる種類の劇に渉ってゐる。喜劇には、散文で書いた拙い處女作 The Wild Gallant (1663) や、軽妙な marriage-à-la-mode (1673), Amphitryon (1690) など大いに成功したものもあるが、要するに喜劇は彼の本領ではなく、その当時の風習を寫した猥らな言葉は Jeremy Collier の非難を蒙った。悲喜劇は、Charles II が「朕の戯曲」として好んだ Secret Love (1667), The Spanish Friar (1681) 等に於て、前代の傳統を維持して書くに止まったが、彼の得意な heroic couplet を用ゐる heroic play に於ては、その大言壮語的な朗々たる調子を完成した。この詩形による作には The Indian Emperor (1665), Tyrannic Love (1669), 傑作 The Conquest of Granada by the Spaniards (1670) 等があるが、Aureng-Zebe (1676) を最後として blank verse に歸り、傑作 all for Love, or the World Well Lost (1678), Don Sebastian (1690), Cleomenes (1692) 等を發表した。彼の散文は平明暢達、しかも威嚴を失はず、これまた当代随一である。就中最も注目すべきは、Neander (Dryden), Lisideius (Sir Charles Sedley), Crites (Sir Robert Howard) 及び Eugenius (Earl of Dorset) の劇的対話の形で、古典と近世作家、英国劇とフランス劇の優劣、rhymed couplet 採用の可否等の諸問題を論じた An Essay of Dramatic Poesy (1668) で、その中の Shakes-

peare, Jonson 等に対する評は、Johnson の所謂 'the father of English criticism' たるに耻ぢぬ名論である。彼の批評は、Grounds of Criticism in Tragedy が Troilus and Cressida (1679) の序となつてゐるやうに、多くは劇の序文として書かれた。1688年の革命の結果、1668年に任命された桂冠詩人の職を失つて後は、劇壇に於ても振はず、Virgil や Juvenal 等を繙訳した。Canterbury Tales や Decameron 等を抄訳した Fables Ancient and Modern (1699) の序は「劇詩論」にも方ちぬ散文の精華である。 (英米文学辞典)

44. Dyer, John, 1700? — 1757.

Poet. Aberglasney (Carmarthenshire) の領主から、Westminster に教育を受け、一時期 Grongar Hill, 又は South Wales 一帯の風景や廃墟を訪ねて歩いた。1727年 Grongar Hill を発表し、1740年には Ruins of Rome を発表。1752年 Belchford に移住。1757年 The Fleece を発行、翌年 Coningsby の聖職に就任。1758年には Kirkby-on-Bane の聖職をも兼ねた。1761年に集めたという。

ムに scenery には出ないが地名となって出ている。Dryden はイタリアに行くにはフランス経由が普通であったが、Johnson の Dyer 評は殆ど悪口である。Dyer の手紙は残存数は少ないが、Johnson の Dyer 評は殆ど悪口である。Grongar Hill, Clothes, Fleecy Care, Ruins of Rome, Country Walk, Poetical Epistle to Lord Lincoln, Epistle to Mr. Lewis, Epistle to Mr. Edwards, Epistle to Mr. Pitt, Epistle to Mr. Ayscough, Epistle to Mr. Mason, Epistle to Mr. Shiels, Epistle to Mr. Dodsley, Epistle to Mr. Bowman, Epistle to Mr. Lloyd, Epistle to Mr. Cambden, Epistle to Mr. Bevan, Epistle to Mr. Bedingfield, Epistle to Mr. Hill, Epistle to Mr. Ward

44. Dyer, John, 1700? — 1757.

Poet. Aberglasney (Carmarthenshire) の弁護士の子。Westminster で教育され、父の office に入れられた。Jonathan Richardson (幾つかの著作をもって知られてゐた人) について art を学び、an itinerant artist として South Wales 及び附近の counties を遊歴して、1727年 'Grongar Hill' を發表し、忽ち名声を博した。painting を学ぶため Italy を訪れ、歸って 1740年 the 'Ruins of Rome' を發表した。マラリヤにかかって健康を害したため、painting は成功しなかった。1741年、vicar of Catthorpe in Leicestershire となり、1751年之を辞して Belchford in Lincolnshire にうつった。翌年 Coningsby の living に薦擧され、1755年には Kirkby-on-Bane の living をあたへられた。1752年、royal mandate により Cambridge で LL. B. になった。生活が安定し、1757年 'The Fleece' を發行した。1758年 肺病で死んだ。彼の短詩は 1761年に集められた。

人々が scenery に対する趣味をもってゐなかった時代に、それを愛した人としては記憶されるべきだらう。Drake は 'Literary Hours' で、Johnson の Dyer 評は厳しすぎると非難してゐるが、Dyer の長詩は現代人には退屈な作である。唯、'Grongar Hill' とその他幾つかの短詩は幾分 charm をもってゐる。彼に宛て書かれた Wordsworth の sonnet によって最もよく人に知られてゐるだらう。

(D. N. B.)

英国の詩人。第十八世紀初期の作としては珍らしい清新な自然描寫を含んだ短詩 Grongar Hill (1727) の作者。The Ruins of Rome (1740), The Fleece (1757) の二長詩もある。

(英米文学辞典)

詩人。Carmarthenshire の Aberglasney の
領主である。Westminster で教育され
父の事務所に置かれた。彼の最初の
もってねらいである Jonathan Richardson に
って美術を学び、通って画家として
South Wales 及び特に彼の領地を通過して
1725年 'Grongar Hill' を書いた。九つの
行詩である。1730年 'Ruins of Rome'
を発表した。健康を害した為イタリアを
訪れ帰って1740年 'Ruins of Rome'
を発表した。健康を害した為イタリアを
成功であった。1741年 Catthorpe の
教区牧師になり1751年これを辞して
Belchford に移った。翌年 Coningsby の聖
職禄に昇進され、1755年には Kirby-
-on-Bane の聖職禄も兼ねた。1757年
~~1758年~~
1757年 'The Fleece' を発行、翌年世を
去った。

この詩人の長詩は現代人には退屈に感じら
れるが、当時の人々には興味をもって読まれ
たことと思われる。人々は説教さえ詩で聞
きたがったのである。

挿入文書

——帝國主義研究——

歷略　明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
　　南洋諸島の研究
　　帝國主義研究
　　日本の侵略を撃す者
著者

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢内原忠雄

東京都千代田區神田神保町三ノ二
發行者　增永要吉

東京都千代田區九段二ノ一
印刷者　保科清奉

發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院　電話九段四三五八番

本製用紙・挿圖印刷　日本印刷工業株式會社印刷

挿入文書

Simson, Robert, 1687 — 1768.

mathematicam. John Simson (a Glasgow mathematician, 1701 — 2年3月 Glasgow Universityにメ学。1711年11月 M.A. の学位を授与。母方の uncle, John Simson (physician of distinction) のアドバイスに従って古典幾何学 Ancient Geometry の研究に没頭。1735年 Glasgow 大学の数学教授に就任。1761年 Edmund Halley の後を継いで天文学教授を兼任。1768年11月14日死去。享年81歳。)

Porismatum Tractatus ; quo doctrinam porismatum satis explicatam, et in posterum ab oblivione tutam fore sperat auctor.

この論文は、彼の死後に出版された遺稿の一つで、彼の生前に出版された唯一の数学書である。

彼は、1723年11月に、Royal Society の会員に選ばれている。

彼は、Euclid の porisms (定理) を復元しようとしたが、Euclid の porisms の定義そのものが不明であったため、彼の復元は誤りであった。

彼は、1723年 James Gunn に与えた Royal Society に推薦状を書いている。Simson は、Pathus-stroke, Porisms と名付けた参考書を3冊書いている。彼は、Corollaries と Propositions に分けて書いている。

'De Porismatibus Tractatus ; quo doctrinam porismatum satis explicatam, et in posterum ab oblivione tutam fore sperat auctor'

ポリスマタ論 に関する論文。

ポリスマタ論 は、Euclid の porisms (定理) を復元しようとしたが、Euclid の porisms の定義そのものが不明であったため、彼の復元は誤りであった。

彼は、1723年11月に、Royal Society の会員に選ばれている。

彼は、1776年に、彼の posthumous works の中に、

the works of the ancient geometricians について、Edmund Halley の書いた論文を見つけ、

Edmund Halley の論文に触発されて、

ポリスマタ論 を書いた。

ポリスマタ論 は、彼の死後に出版された遺稿の一つで、彼の生前に出版された唯一の数学書である。

'De Porismatibus Tractatus ; quo doctrinam porismatum satis explicatam, et in posterum ab oblivione tutam fore sperat auctor'

45.

Simson, Robert, 1687 — 1768.

mathematician。John Simson (a Glasgow merchant) の子。1701—2年3月 Glasgow University に入学。1711年11月 M.A. の学位を得て卒業。母方の uncle, John Simson (professor of divinity) の下で学び、classical attainments と knowledge of botany においてすぐれてみた。父は彼を牧師にさせようとしたが、大学生活の後半から mathematics に心を向ける様になり、ロンドンで一年間研究後、1711—12年 3月、Glasgow 大学の mathematics 教授に選ばれた。

London に滞在中 several eminent mathematicians と近づきになった。その中の一人 Edmund Halley の感化で the works of the Greek geometricians に対する愛好が一層強まった。最初彼は Euclid の porisms (それは Pappus of Alexandria の 'Collectiones Mathematicæ' の中の short account によってのみ知られてゐるもの) に注意を向けた。Euclid の著作は以前にも復原を企てられたが、この仕事に real light を投じたのは Simson が最初である。1723年 James Jurin によって the Royal Society に伝達された paper の中で、Simson は、Pappus が残りの porisms をその中に要約してゐる二つの general propositions を説明してゐる。彼はその研究を更にすゝめて 'De Porismatibus Tractatus ; quo doctrinam porismatum satis explicatam, et in posterum ab oblivione tutam fore sperat auctor' と題する論文を書いた。之は1776年彼の post-humous works の中に含

「系に関する研究；それによって系論が充分に解明され、将来忘却より護られる事を著者は期待する」

題する論文を一七七六年度版の中に
発表した。
一七三五年 'Sectionum Conicarum Libri V' (Edinburgh. 4to) を発行。
一七三八年 Apollonius の 'Loci Plani' の
修補を完成。一七四九年 'Apollonii
Pergæi Locorum Planorum libri II,
restituti a R. Simson' (Glasgow, 4to) を
発行。次に Apollonius の 'Sectio
Determinata' の校訂に従頭。成果は次
の如くだ。
彼の復原は別項定理とほぼ(ただ多くの
場合に幾何的でなく解析的である)古代数
学の不明な箇所も解明しているが、功績
が第一。
一七四八年、St. Andrews 大学から M.D.
の名誉学位を授与された。一七五六年 the
'Elements of Euclid' の 5 edition を発行 (Glasgow, 4to)
一七六二年に 'Data' を出した。彼の校
訂は正確さの点で最も高く評価され現代
の数学の基礎となっている。一方古典と

数学者として幸福。神学教授であった他の伯父 A.
に誘われてよくグラスゴーに出かけた。
数学に興味を向けるようになったのは
研究は一七二一―二年ころからで一七二三年
学の数学教授に選ばれた。
ロンドンに滞在中 Edmund Halley の感
化でギリシャの幾何学者の著作に対する
興味が一層強められた。Euclid の porism
に従来と異なる解釈を下した。Euclid の porism
解釈は次の定義による。「命題に直接に明
らかでないが、ある仮設から帰納的に
導かれる命題」。この論文の表題は 'De Poris-
matibus Tractatus; quo doctrinam poris-
matum satis explicatam, et in posterum
ab oblivione tutam fore sperat auctor'

挿入文書

——帝國主義研究——

歷　明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
略　著書　植民及植民政策
　　南洋群島の研究
著　帝國主義研究
著　日本の傷を憂ふる者

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄
東京都千代田區神田神保町三ノ二
發行者　增永與吉
東京都千代田區九段二丁目一
印刷者　保科清泰
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院
電話九段四三五八番

會員番號　A 208006

日本印刷工業株式會社印刷・挂川製本

——帝國主義研究——

歷　明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
略　著書　植民及植民政策
　　南洋群島の研究
著　帝國主義研究
著　日本の傷を憂ふる者

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄
東京都千代田區神田神保町三ノ二
發行者　增永與吉
東京都千代田區九段二丁目一
印刷者　保科清泰
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院
電話九段四三五八番

會員番號　A 208006

日本印刷工業株式會社印刷・挂川製本

挿入文書

シムソン 3.

事實は、彼は Euclid を完全無缺に
てすらも又ものも構成、編者や寫字生
に負はせてゐる。

一七七年ごろ、彼は彼の
未發表作の發見には以上に勇氣に
ちみ、非ユークリッド論文 'De Logarithmis liber', 'De Limitibus Quantitatum et Rationum, Fragmentum' を公にした。

挿入文書

——帝國主義研究——

歷略

著者

明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
南洋群島の研究
帝國主義研究
日本の使命を辭す者

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄

東京都千代田區神田神保町三ノ二

發行者　增永要吉

東京都千代田區九段二丁目一

印刷者　保科清泰

發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院　電話九段四三五八番

會員番號　A 208006

日本印刷工業株式會社印刷・掛川製本

挿入文書

表された。

1735年 'Sectionum Conicarum Libri V' (Edinburgh, 4to) を發行。彼は 'conics' の algebraical treatment を嫌ひ、その著の中で 'the purer model of antiquity' に立歸つてゐる。增補版が 1750年發行された。

「円錐曲線論五巻」

1738年, Apollonius の 'Loci Plani' の校訂 (restoration) を完成、その conclusions を 1749年、'Apollonii Pergæi Locorum Planorum libri II, restituti a R. Simson' (Glasgow, 4to) の中に發表した。

「ペルガのアポロニウスの平面軌跡論二巻, R.シムソンにより復原さる」

次いで彼は Apollonius の 'Sectio Determinata' の校訂に没頭した。その成果は彼の死後出版された。古典的な mathematical fragments に関する彼の研究は、(彼の為した復原は到底完全とはいへず、又多くの場合に臆測的であり勝であるが)、ancient geometry の不明な箇所を解明した点では功績が著しい。

1746年, St. Andrews 大学から M.D. の honorary degree を授与された。1756年 the 'Elements of Euclid' の edition を發行 (Glasgow, 4to ; 24th ed. 1834), 1762年, 之に 'Data' を加へた。彼の edition は正確さに於て常に高く評価され、現代の text-books の基礎となつてゐるが、一方 antiquity を尊重する余り critical discernment に欠ける例もなくはない。Euclid を完全無缺と信じた彼はすべての shortcomings を editors や copyists に負はせてゐる。

「ユークリッド要綱」

未發表著作の posthumous edition は 1776年 Glasgow で發行された。その中には、以上に挙げたもの、外、二つの小論文 'De Logarithmis liber', 'De Limitibus Quantitatum et Rationum, Fragmentum' が含まれてゐる。the 'Elements of Plane Trigonometry' は、'Elements of Euclid' の later editions と共に發行され、又、1841年 Dublin に於て單独で發行された。(D.N.B.)

「対数論」「量と比の極限に関する断片」

ゃb. Jordun, fl. 1384?
Walter Bower の大著 'Scotichronicon' の一一章 — 著者 — 著
書の最重要。第六—十三章 (1363年から1384年の
間に) の材料は Annales (c. 1150 A.D.) 迄。第十四章
は Abbot Bower or others of Fleurus の報告の 18年は Abbot Baldred of

'Chronica Gentis Scotorum', c. 'Gesta Annalia'. 共他多くの著作。

Fordun の書にかなり、共現代まで伝えられるのは、

Walter Bower の大著 'Scotichronicon' は Fordun の書に加えた彼の Chronica に始まる。

Edward 'Langschankes' の治世の間の事は、ほとんど Bower の独自の材料。又、他の書にはない多くの事実。第十四章 — 第十六章 (第十六章) が Bower の書の中心。

Scotichronicon の大部分は Bower の手になる。

Bower は Aberdeen の大聖堂の chantrey priest であったので、Aberdeen の教会の歴史に関する多くの文書を利用できた。

'Scotichronicon' は十一一ページにも及ぶ大著。

'Chronica Gentis Scotorum', は、第一章 — 第五章 (第一章 — 第十六章) の内容。

第一章 Gaoat Brittain から最後の王 Jargus まで Maximus と Theodosius (c. 395 A.D.) 迄。第二章 Marcellus the Great の時代 (c. 814 A.D.) 第三章 Malcolm Canmore の治世 (1057 A.D.) 第四章 Malcolm の子 David の治世 (1153 A.D.) 迄。第五章 Malcolm の治世の 18年は Abbot Baldred on affairs of Fleurus

Jordun, fl. 1384?

Walter Bower の大著 'Scotichronicon' の第一章 — 第五章 — 第六章 — 第十三章 (1363年から1384年の間に) の材料は Annales (c. 1150 A.D.) 迄。第十四章は Abbot Baldred on affairs of Fleurus の時代まで伝えられるのは、'Chronica Gentis Scotorum', c. 'Gesta Annalia'. 共他多くの著作。

Fordun の書にかなり、共現代まで伝えられるのは、

Walter Bower の大著 'Scotichronicon' は Fordun の書に加えた彼の Chronica に始まる。

Edward 'Langschankes' の治世の間の事は、ほとんど Bower の独自の材料。又、他の書にはない多くの事実。第十四章 — 第十六章 (第十六章) が Bower の書の中心。

Scotichronicon の大部分は Bower の手になる。

Bower は Aberdeen の大聖堂の chantrey priest であったので、Aberdeen の教会の歴史に関する多くの文書を利用できた。

'Scotichronicon' は十一一ページにも及ぶ大著。

'Chronica Gentis Scotorum', は、第一章 — 第五章 (第一章 — 第十六章) の内容。

第一章 Gaoat Brittain から最後の王 Jargus まで Maximus と Theodosius (c. 395 A.D.) 迄。第二章 Marcellus the Great の時代 (c. 814 A.D.) 第三章 Malcolm Canmore の治世 (1057 A.D.) 第四章 Malcolm の子 David の治世 (1153 A.D.) 迄。第五章 Malcolm の治世の 18年は Abbot Baldred on affairs of Fleurus

スコットランド年代記

46. Fordun, John, d. 1384?

Walter Bowerの大著 'Scotichronicon'の第一書 — 第五書の原著者。第六書の始めの23章も彼の筆。又、Bowerの書いた部分(第六書 — 第十六書)の中でも、1383年迄の記事はFordunのnotesに基づくものが多い。

生涯については、'Scotichronicon'のlater redactionsのprefacesによって知られるのみであるが、Aberdeenのcathedralの'chantrey priest'であったと推定されている。

暴君Edward 'Langschankes'が、スコットランド厚史のtruly nationalなrecordsをすべてEnglandへ持ち去るか焼くかしてしまった。Fordunはそれを償はうとして、資料を蒐めにEnglandへ旅した(1363年から1384年の間の時期に)。彼のannalsは1384年で終り、間もなく死んだらしい。

Fordunの書いたものの中現存するものは、1.'Chronica Gentis Scotorum', 2.'Gesta Annalia'。其他若干の'materials'。これら資料の大部分は彼のChronicaに編み込まれた。その他はthe 'controversy with England as to the independence of Scotland'に関するdocumentsより成る。

'Chronica Gentis Scotorum'は、第一書 神話、第二書 Great Britainにおける彼等の最初の王 Fergusより Maximus と Theodosius (c. 395 A.D.) 迄, 第三書 Charles the Greatの時代迄 (c. 814 A.D.), 第四書 Macbethの治世迄 (1057 A.D.), 第五書 Malcolm Canmoreの即位から King Davidの死 (1153 A.D.) 迄。第五書の最後の18章は Abbot Baldred or Aibred of Rievau-

「スコットランド民族年代記」
「年譜」

フォルダン

Walter Bower の大著 'Scotichronicon' の第1章 — 第2章の序文。第3章から二十三章も彼の筆。又 Bower の章に続く（第4章 — 第十六章）のうち一三八三年以前の記事はフォルダンのノートに基づくものが多い。

史観については 'Scotichronicon' の許容の序にもっとも明らかにされているであろう。Aberdeen の大聖堂 cathedral 聖職者 chantrey priest であった Bower はこの序文にスコットランドの国政的 Edward 'Langschankes' 侵略に対抗して英雄的に戦った Robert Bruce を讃美している。フォルダンはそれとは異なり一三八四年から一三八九年の国の状態に対して消極的な態度を取っている。彼の annals は一三八四年で終っている。

Fordun の書にもとづき、現在すでに失われた 'Chronica Gentis Scotorum' と 'Gesta Annalia' 其他若干の資料。これらの大部分は彼の Chronica に編入されている。

フォルダン 2.

古い伝説や地名は眼識のすぐれた「史家」ではないが彼の時代に近くにつれ次第に価値ある情報となる。事件にフォルダン上の資料が用いられている事は疑いない。

挿入文書

帝國主義研究

著者略歴

著者略歴

発行所　株式会社　白日書院
東京都千代田区三崎町二ノ九
電話九段(33)五八〇番

印刷者　保化田忠男
印刷所　東京都千代田区三崎町二ノ九

発行者　増田義一
発行所　株式会社　白日書院
東京都千代田区三崎町二ノ九
電話九段(33)五八〇番

昭和十四年六月一日　第一回発行
昭和十四年六月廿日　第二回発行

定価二百五十圓

倉庫番號　A.208005

日本評論社印刷所(株)大倉組印刷・若川製本

挿入文書

lx の 'Lamentatio pro morte regis David' よりの extracts。
そのあとを 'Gesta Annalia' がついで、Malcolm IV の即位
(1153 A.D.) より 1383 A.D. まで述べてある。第六書の中の
historical chapters は、Cerdic (or rather Woden) より
Edward the Confessor の死に至る English history の
sketch である。

古い時代を扱う場合は眼識のすぐれた historian とは云
へないが、彼の時代に近づくにつれ次第に価値を發揮して来
る。彼の著作に Irish materials が用ゐられてゐる事は疑
ない。 (D. N. B.)

subject matter と methods と illustrate する作品を書いている。

it works it.

editions of the Scriptores rei rusticae, of Quintilian, Claudian, Pliny the Younger, Horace and the Orphic poems (校訂版)

Primae lineae isagoges in erudition[em] universalem (1756)

B. Faber の Thesaurus eruditionis scholasticae (1726) の an edition で Novus linguae et eruditionis Romanae thesaurus (1749)。

Opuscula minora varii argumenti (1743 — 1745)

47. Gesner, Johann Matthias, 1691 — 1761.

Gymnasium classical scholae and schoolmaster. Ansbach に住む Roth で 1715 年 Weimar で 1729 年 Ansbach で 1730 年に classical gymnasium の rector, 1734 年 Jena で Lucian の the Philopatris に基づく作品で博士号を得た。Göttingen で 1734 年に classical authors の editions を出版。Ansbach に戻り Roth で古典語の研究に専念。

the Scriptores rei rusticae, of Quintilian, Claudian, Pliny the Younger, Horace and the Orphic poems (校訂版)

Primae lineae isagoges in erudition[em] universalem (1756)

B. Faber の Thesaurus eruditionis scholasticae (1726) の an edition で Novus linguae et eruditionis Romanae thesaurus (1749)。

Opuscula minora varii argumenti (1743 — 1745)

Grammar, classical scholar and schoolmaster. Ansbach に住む Roth で 1715 年 Weimar で 1729 年 Ansbach で 1730 年に classical gymnasium の rector, 1734 年 Jena で Lucian の the Philopatris に基づく作品で博士号を得た。Göttingen で 1734 年に classical authors の editions を出版。Ansbach に戻り Roth で古典語の研究に専念。

Opuscula minora varii argumenti (1743 — 1745)

Gesner, Johann Matthias, 1691 — 1761.

47. Gesner, Johann Matthias, 1691—1761.

German classical scholar and schoolmaster.
Ansbach に近い Roth で生る。Jena 大学に学び 1714年, Lucian 作と看做されてゐる the Philopatris に就いその著作を公にした。1715年 Weimar で librarian and conrector (vice-principal) となり、1729年 Ansbach の gymnasium の rector, 1730年には Leipzig の Thomas school の rector となった。Göttingen 大学創立と共に 1734年、rhetoric 教授となり、後 librarian となった。Göttingen で歿。彼の功績は、classical authors の subject matter を explain と illustrate する事に力を注いだ点にある。

主な works は

editions of the Scriptores rei rusticae; of Quintilian, Claudian, Pliny the Younger, Horace and the Orphic poems (彼の死後出版)

Primae lineae isagoges in eruditionem universalem (1756)

an edition of B. Faber's Thesaurus eruditionis scholasticae (1726); afterwards continued under the title Novus linguae et eruditionis Romanae thesaurus (1749)

Opuscula minora varii argumenti (1743—1745).

Thesaurus epistolicus Gesnerianus (ed. Klotz, 1768—1770)

Index etymologicus latinitatis (1749).

(E. B.)

拙 著述家達

「農業の詩人達」(Quintilian, Claudian ...

「普遍的学識への序説」

スコラ学派 学識の宝庫
修辞学?
ローマの言語と学問の新宝庫

「小品さまざま」

「Gesner 書簡集」

「ラテン語 語源索引」

ドイツの古典学者。Ansbach に近い Roth に生る。Jena 大学に学び 1714 年 Lucian の著作を書いている。the Philopatris に就いての論文を公にした。1715 年 Weimar の司書・副校長となり 1729 年 Ansbach のギムナジウムの校長、翌年には Leipzig 大学古典の修辞学教授に就任した。彼の功績は Göttingen 大学創立と作曲学校に就いての論文はである。

the Scriptores rei rusticae, of Quintilian, Claudian, Pliny the Younger, Horace and the Orphic poems (5 editions)

Primae lineae isagoges in eruditionem universalem (1756)

B. Faber の Thesaurus eruditionis scholasticae (1726) の an edition 又は Novus linguae et eruditionis Romanae thesaurus の増補版 (1749).

Opuscula minora varii argumenti (1743 — 1745)

Thesaurus epistolicus Gesnerianus (ed. Klotz, 1768— 1770)

Index etymologicus latinitatis (1749).

挿入文書

——帝國主義研究——

歷略　明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
南洋諸島の研究
帝國主義研究
日本の傷を醫す者
著者

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄
發行者　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院
印刷者　東京都千代田區九段二丁目一　保科清春
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院　電話九段四三五八番

會員番號　A 208006

本製川桂・印刷社會式會業工刷印本日

——帝國主義研究——

歷略　明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
南洋諸島の研究
帝國主義研究
日本の傷を醫す者
著者

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄
發行者　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院
印刷者　東京都千代田區九段二丁目一　保科清春
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院　電話九段四三五八番

會員番號　A 208006

本製川桂・印刷社會式會業工刷印本日

挿入文書

48. Gilles, Pierre, 1490 — 1555.

en latin Gyllius, naturaliste et voyageur français, né à Albi en 1490, mort en 1555. Il se livra particulièrement à l'étude de l'ichthyologie, parcourut la Méditerranée et l'Adriatique pour étudier les poissons de ces deux mers, entreprit, par ordre de François Ier, un voyage en Orient, visita l'Asie Mineure, les ruines de Chalcedoine, mais, manquant de ressources, se vit obligé de prendre du service dans les troupes de l'empereur Soliman III. Revenu en Europe après avoir perdu toutes ses collections d'histoire naturelle, il se retira à Rome, auprès du cardinal d'Armagnac, son protecteur. On a de lui : Ex Æliano historia ...; De vi natura animalium ...; De nominibus piscium (Lyon, 1533, in-4°), traduction latine d'Élien, augmentée des propres recherches de Gilles; De Bosphoro Thracio (1561, in-4°); Topographia Constantinopoleos (1561, in 4°).

(P. Larousse : Grand Dictionnaire Universel)

(ラテン語では Gyllius.) フランスの博物学者・旅行家. アルビイに1490年に生れ 1555年死. (彼は) 特に魚類学に専念し、地中海アドリア海の魚類を研究するために両海をくまなく旅した. フランソワ一世の命をうけて東洋旅行を企て、小アジヤ Chalcedoine の廃墟をたづねた. しかし旅費に困って、ソリマン三世の軍隊に従軍を余儀なくされた. 博物学に関する彼の蒐集のすべてを失って後ヨーロッパに帰って、ローマの、彼の保護者 枢機卿 ダルマニヤックのもとにおちついた. 彼の著作には : エリヤンの自然史抄 ; 動物の ___ ; 魚介類の名について (リヨン, 1533, in-4°); エリヤンのラテン語訳に gilles 自身の研究を附せたもの ; トラキヤ海峡について (1561, in-4°) ; コンスタンチノープルの地誌 (1561, in 4°).

49. Giovio, Paolo, bp. of Nocera, 1483 — 1552.

Storico, nato a Como il 19 aprile 1483, morto a Firenze il 10 dicembre 1552. Fratello minore di Benedetto (storiografo di Como). Studiò a Pavia e poi a Padova col Pomponazzi. Esercitò per qualche tempo la medicina in patria, ma ben presto dalla sua inclinazione di osservatore di uomini e cose, nonché di raccoglitore e collezionista, fu tratto a girare l'Italia e talora l'Europa. Nel 1509 fu presente alla battaglia d'Agnadello; circa il 1513 si recò a Roma, dove fu bene accolto da Leone X; nel 1519 accompagnò Giulio de' Medici (il futuro Clemente VII) a Firenze; nel 1521 si trovò con le truppe pontificie e cesaree all'assedio di Como; nel 1522 era a Roma, donde Adriano VI lo mandò a Mantova per una missione; tornato a Roma, divenne favorito di Clemente VII, che assistette durante il sacco del 1527 e la chiusura in Castel Sant'Angelo e da cui nel 1528 fu nominato vescovo di Nocera dei Pagani; durante la spedizione del Lautrec era a Ischia, donde fu testimone delle battaglie navali; nel 1529 con Ippolito de' Medici andò a Bologna per l'incoronazione di Carlo V; nel 1532 compì un viaggio in Germania; nello stesso anno tornò a Bologna, donde s'avviò a Roma con Clemente VII, che nel 1533 seguì a Marsiglia; assistè al

49. Giovio, Paolo, bp. of Nocera, 1483 — 1552.

Storico, nato a Como il 19 aprile 1483, morto a Firenze il 10 dicembre 1552. Fratello minore di Benedetto (storiografo di Como). Studiò a Pavia e poi a Padova col Pomponazzi. Esercitò per qualche tempo la medicina in patria, ma ben presto dalla sua inclinazione di osservatore di uomini e cose, nonché di raccoglitore e collezionista, fu tratto a girare l'Italia e talora l'Europa. Nel 1509 fu presente alla battaglia d'Agnadello; circa il 1513 si recò a Roma, dove fu bene accolto da Leone X; nel 1519 accompagnò Giulio de' Medici (il futuro Clemente VII) a Firenze; nel 1521 si trovò con le truppe pontificie e cesaree all'assedio di Como; nel 1522 era a Roma, donde Adriano VI lo mandò a Mantova per una missione; tornato a Roma, divenne favorito di Clemente VII, che assistette durante il sacco del 1527 e la chiusura in Castel Sant'Angelo e da cui nel 1528 fu nominato vescovo di Nocera dei Pagani; durante la spedizione del Lautrec era a Ischia, donde fu testimone delle battaglie navali; nel 1529 con Ippolito de' Medici andò a Bologna per l'incoronazione di Carlo V; nel 1532 compì un viaggio in Germania; nello stesso anno tornò a Bologna, donde s'avviò a Roma con Clemente VII, che nel 1533 seguì a Marsiglia; assistè al

1483年4月19日 コーモに生れ、1552年12月10日 フローレンスに死去した歴史家。ベネデット(コーモの史料編纂家)の弟。パヴィア、それからパドヴァのポンポナッツィの下で学んだ。しばらく郷里で医師を開業したが、その後すぐに人間と事物の観察者、採集家、蒐集家としての好みから、イタリア 時にはヨーロッパを旅行するようになった。1509年アニアデルロの戦闘に参加した。1513年頃ローマに赴き、レオ十世から歓迎を受けた。1519年ジュリオ・デ・メディチ(後のクレメンテ七世)をフローレンスにともなった。1521年コーモの攻囲の際、ローマ法王及びチェザレ・ボルジヤの軍隊中にあった。1522年ローマにあって、アドリアーノ六世は彼をマントヴァにつかはした。ローマに帰ると、クレメンテ七世の寵子となり、1527年のドイツ軍のローマ掠奪と法王の聖天使城に逼塞中、法王の側を離れず、1528年 邦教徒のノチエーラの司教に任ぜられた。ロートレックの遠征中イスキヤ島にあって、このため海戦に立会ってゐる。1529年イポリト・デ・メディチと共にカール五世の戴冠のためボローニヤに赴いた。1532年にはドイツに旅してゐる。同年ボローニヤに帰り、そこからクレメンテ七世と共にローマに向ひ、1533年マルセイユに進行した。

庭と壁画（特に彼自身が下絵を描いたとされる）とも有名。又彼の有名な彼の肖像、狩猟の見取、多国籍な絵、品々と贈物を収容する為の、ローマ、聖蔵室、ローマ各地の著名人が

なった。一五三八年、多国籍な絵、品々と贈物を収容する為の、ローマ、聖蔵室、ローマ各地の著名人が

ファルネーゼ一世に謁見のためミラノに赴き、一五四一年にはローマにてアンヌ・ド・モンモランシーと謁見。一五四二年フランソワ一世の招きによりフォンテーヌブローに赴き、一五四五年フランソワ一世の娘マルグリットと結婚。一五四六年ローマに戻り、一五四七年フランソワ一世の死後、アンリ二世の宮廷画家となる。一五五〇年ローマに戻り、一五五一年フランソワ一世の死後、アンリ二世の宮廷画家となる。一五五〇年ローマに戻り、一五五一年フランソワ一世の死後、アンリ二世の宮廷画家となる。

彼の著述は大部分 Latino d'oro 天草ラテン語であるが、その中一五三一年ヴェニスで出版された、トルコ人の諸事に関する "Commentari 私記" が有名で、これは一五三七年 De rebus gestis et vitis imperatorum Turcarum ... (オスマン帝国歴代皇帝の功績と生涯)

工史家。コーモにパオロ・ジョヴィオ、フローンスに北ゐた。ローマに居住して、ウルビーノ公国（一五三一）やコーモの故国（一五三一）に於ける、アドリア一六世の使節としてクレメンス七世のヴェネツィア、ヴェローナ、ミラノ、ローマ、ナポリ、フィレンツェ、ボローニャ等の諸都市を旅行。一五三四年ローマに赴き、一五三五年ヴェネツィアに旅行。一五三六年ローマに赴き、一五三七年ヴェネツィアに旅行。一五三八年ローマに赴き、一五三九年ヴェネツィアに旅行。一五四〇年ローマに赴き、一五四一年ヴェネツィアに旅行。一五四二年ローマに赴き、一五四三年ヴェネツィアに旅行。一五四四年ローマに赴き、一五四五年ヴェネツィアに旅行。一五四六年ローマに赴き、一五四七年ヴェネツィアに旅行。一五四八年ローマに赴き、一五四九年ヴェネツィアに旅行。一五五〇年ローマに赴き、一五五一年ヴェネツィアに旅行。一五五二年ローマに赴き、一五五三年ヴェネツィアに旅行。一五五四年ローマに赴き、一五五五年ヴェネツィアに旅行。一五五六年ローマに赴き、一五五七年ヴェネツィアに旅行。一五五八年ローマに赴き、一五五九年ヴェネツィアに旅行。一五六〇年ローマに赴き、一五六一年ヴェネツィアに旅行。一五六二年ローマに赴き、一五六三年ヴェネツィアに旅行。一五六四年ローマに赴き、一五六五年ヴェネツィアに旅行。一五六六年ローマに赴き、一五六七年ヴェネツィアに旅行。一五六八年ローマに赴き、一五六九年ヴェネツィアに旅行。一五七〇年ローマに赴き、一五七一年ヴェネツィアに旅行。一五七二年ローマに赴き、一五七三年ヴェネツィアに旅行。一五七四年ローマに赴き、一五七五年ヴェネツィアに旅行。一五七六年ローマに赴き、一五七七年ヴェネツィアに旅行。一五七八年ローマに赴き、一五七九年ヴェネツィアに旅行。一五八〇年ローマに赴き、一五八一年ヴェネツィアに旅行。一五八二年ローマに赴き、一五八三年ヴェネツィアに旅行。一五八四年ローマに赴き、一五八五年ヴェネツィアに旅行。一五八六年ローマに赴き、一五八七年ヴェネツィアに旅行。一五八八年ローマに赴き、一五八九年ヴェネツィアに旅行。一五九〇年ローマに赴き、一五九一年ヴェネツィアに旅行。一五九二年ローマに赴き、一五九三年ヴェネツィアに旅行。一五九四年ローマに赴き、一五九五年ヴェネツィアに旅行。一五九六年ローマに赴き、一五九七年ヴェネツィアに旅行。一五九八年ローマに赴き、一五九九年ヴェネツィアに旅行。一六〇〇年ローマに赴き、一六〇一年ヴェネツィアに旅行。一六〇二年ローマに赴き、一六〇三年ヴェネツィアに旅行。一六〇四年ローマに赴き、一六〇五年ヴェネツィアに旅行。一六〇六年ローマに赴き、一六〇七年ヴェネツィアに旅行。一六〇八年ローマに赴き、一六〇九年ヴェネツィアに旅行。一六一〇年ローマに赴き、一六一一年ヴェネツィアに旅行。一六一二年ローマに赴き、一六一三年ヴェネツィアに旅行。一六一四年ローマに赴き、一六一五年ヴェネツィアに旅行。一六一六年ローマに赴き、一六一七年ヴェネツィアに旅行。一六一八年ローマに赴き、一六一九年ヴェネツィアに旅行。一六二〇年ローマに赴き、一六二一年ヴェネツィアに旅行。一六二二年ローマに赴き、一六二三年ヴェネツィアに旅行。一六二四年ローマに赴き、一六二五年ヴェネツィアに旅行。一六二六年ローマに赴き、一六二七年ヴェネツィアに旅行。一六二八年ローマに赴き、一六二九年ヴェネツィアに旅行。一六三〇年ローマに赴き、一六三一年ヴェネツィアに旅行。一六三二年ローマに赴き、一六三三年ヴェネツィアに旅行。一六三四年ローマに赴き、一六三五年ヴェネツィアに旅行。一六三六年ローマに赴き、一六三七年ヴェネツィアに旅行。一六三八年ローマに赴き、一六三九年ヴェネツィアに旅行。一六四〇年ローマに赴き、一六四一年ヴェネツィアに旅行。一六四二年ローマに赴き、一六四三年ヴェネツィアに旅行。一六四四年ローマに赴き、一六四五年ヴェネツィアに旅行。一六四六年ローマに赴き、一六四七年ヴェネツィアに旅行。一六四八年ローマに赴き、一六四九年ヴェネツィアに旅行。一六五〇年ローマに赴き、一六五一年ヴェネツィアに旅行。一六五二年ローマに赴き、一六五三年ヴェネツィアに旅行。一六五四年ローマに赴き、一六五五年ヴェネツィアに旅行。一六五六年ローマに赴き、一六五七年ヴェネツィアに旅行。一六五八年ローマに赴き、一六五九年ヴェネツィアに旅行。一六六〇年ローマに赴き、一六六一年ヴェネツィアに旅行。一六六二年ローマに赴き、一六六三年ヴェネツィアに旅行。一六六四年ローマに赴き、一六六五年ヴェネツィアに旅行。一六六六年ローマに赴き、一六六七年ヴェネツィアに旅行。一六六八年ローマに赴き、一六六九年ヴェネツィアに旅行。一六七〇年ローマに赴き、一六七一年ヴェネツィアに旅行。一六七二年ローマに赴き、一六七三年ヴェネツィアに旅行。一六七四年ローマに赴き、一六七五年ヴェネツィアに旅行。一六七六年ローマに赴き、一六七七年ヴェネツィアに旅行。一六七八年ローマに赴き、一六七九年ヴェネツィアに旅行。一六八〇年ローマに赴き、一六八一年ヴェネツィアに旅行。一六八二年ローマに赴き、一六八三年ヴェネツィアに旅行。一六八四年ローマに赴き、一六八五年ヴェネツィアに旅行。一六八六年ローマに赴き、一六八七年ヴェネツィアに旅行。一六八八年ローマに赴き、一六八九年ヴェネツィアに旅行。一六九〇年ローマに赴き、一六九一年ヴェネツィアに旅行。一六九二年ローマに赴き、一六九三年ヴェネツィアに旅行。一六九四年ローマに赴き、一六九五年ヴェネツィアに旅行。一六九六年ローマに赴き、一六九七年ヴェネツィアに旅行。一六九八年ローマに赴き、一六九九年ヴェネツィアに旅行。一七〇〇年ローマに赴き、一七〇一年ヴェネツィアに旅行。一七〇二年ローマに赴き、一七〇三年ヴェネツィアに旅行。一七〇四年ローマに赴き、一七〇五年ヴェネツィアに旅行。一七〇六年ローマに赴き、一七〇七年ヴェネツィアに旅行。一七〇八年ローマに赴き、一七〇九年ヴェネツィアに旅行。一七一〇年ローマに赴き、一七一一年ヴェネツィアに旅行。一七一二年ローマに赴き、一七一三年ヴェネツィアに旅行。一七一四年ローマに赴き、一七一五年ヴェネツィアに旅行。一七一六年ローマに赴き、一七一七年ヴェネツィアに旅行。一七一八年ローマに赴き、一七一九年ヴェネツィアに旅行。一七二〇年ローマに赴き、一七二一年ヴェネツィアに旅行。一七二二年ローマに赴き、一七二三年ヴェネツィアに旅行。一七二四年ローマに赴き、一七二五年ヴェネツィアに旅行。一七二六年ローマに赴き、一七二七年ヴェネツィアに旅行。一七二八年ローマに赴き、一七二九年ヴェネツィアに旅行。一七三〇年ローマに赴き、一七三一年ヴェネツィアに旅行。一七三二年ローマに赴き、一七三三年ヴェネツィアに旅行。一七三四年ローマに赴き、一七三五年ヴェネツィアに旅行。一七三六年ローマに赴き、一七三七年ヴェネツィアに旅行。一七三八年ローマに赴き、一七三九年ヴェネツィアに旅行。一七四〇年ローマに赴き、一七四一年ヴェネツィアに旅行。一七四二年ローマに赴き、一七四三年ヴェネツィアに旅行。一七四四年ローマに赴き、一七四五年ヴェネツィアに旅行。一七四六年ローマに赴き、一七四七年ヴェネツィアに旅行。一七四八年ローマに赴き、一七四九年ヴェネツィアに旅行。一七五〇年ローマに赴き、一七五一年ヴェネツィアに旅行。一七五二年ローマに赴き、一七五三年ヴェネツィアに旅行。一七五四年ローマに赴き、一七五五年ヴェネツィアに旅行。一七五六年ローマに赴き、一七五七年ヴェネツィアに旅行。一七五八年ローマに赴き、一七五九年ヴェネツィアに旅行。一七六〇年ローマに赴き、一七六一年ヴェネツィアに旅行。一七六二年ローマに赴き、一七六三年ヴェネツィアに旅行。一七六四年ローマに赴き、一七六五年ヴェネツィアに旅行。一七六六年ローマに赴き、一七六七年ヴェネツィアに旅行。一七六八年ローマに赴き、一七六九年ヴェネツィアに旅行。一七七〇年ローマに赴き、一七七一年ヴェネツィアに旅行。一七七二年ローマに赴き、一七七三年ヴェネツィアに旅行。一七七四年ローマに赴き、一七七五年ヴェネツィアに旅行。一七七六年ローマに赴き、一七七七年ヴェネツィアに旅行。一七七八年ローマに赴き、一七七九年ヴェネツィアに旅行。一七八〇年ローマに赴き、一七八一年ヴェネツィアに旅行。一七八二年ローマに赴き、一七八三年ヴェネツィアに旅行。一七八四年ローマに赴き、一七八五年ヴェネツィアに旅行。一七八六年ローマに赴き、一七八七年ヴェネツィアに旅行。一七八八年ローマに赴き、一七八九年ヴェネツィアに旅行。一七九〇年ローマに赴き、一七九一年ヴェネツィアに旅行。一七九二年ローマに赴き、一七九三年ヴェネツィアに旅行。一七九四年ローマに赴き、一七九五年ヴェネツィアに旅行。一七九六年ローマに赴き、一七九七年ヴェネツィアに旅行。一七九八年ローマに赴き、一七九九年ヴェネツィアに旅行。一八〇〇年ローマに赴き、一八〇一年ヴェネツィアに旅行。一八〇二年ローマに赴き、一八〇三年ヴェネツィアに旅行。一八〇四年ローマに赴き、一八〇五年ヴェネツィアに旅行。一八〇六年ローマに赴き、一八〇七年ヴェネツィアに旅行。一八〇八年ローマに赴き、一八〇九年ヴェネツィアに旅行。一八一〇年ローマに赴き、一八一一年ヴェネツィアに旅行。一八一二年ローマに赴き、一八一三年ヴェネツィアに旅行。一八一四年ローマに赴き、一八一五年ヴェネツィアに旅行。一八一六年ローマに赴き、一八一七年ヴェネツィアに旅行。一八一八年ローマに赴き、一八一九年ヴェネツィアに旅行。一八二〇年ローマに赴き、一八二一年ヴェネツィアに旅行。一八二二年ローマに赴き、一八二三年ヴェネツィアに旅行。一八二四年ローマに赴き、一八二五年ヴェネツィアに旅行。一八二六年ローマに赴き、一八二七年ヴェネツィアに旅行。一八二八年ローマに赴き、一八二九年ヴェネツィアに旅行。一八三〇年ローマに赴き、一八三一年ヴェネツィアに旅行。一八三二年ローマに赴き、一八三三年ヴェネツィアに旅行。一八三四年ローマに赴き、一八三五年ヴェネツィアに旅行。一八三六年ローマに赴き、一八三七年ヴェネツィアに旅行。一八三八年ローマに赴き、一八三九年ヴェネツィアに旅行。一八四〇年ローマに赴き、一八四一年ヴェネツィアに旅行。一八四二年ローマに赴き、一八四三年ヴェネツィアに旅行。一八四四年ローマに赴き、一八四五年ヴェネツィアに旅行。一八四六年ローマに赴き、一八四七年ヴェネツィアに旅行。一八四八年ローマに赴き、一八四九年ヴェネツィアに旅行。一八五〇年ローマに赴き、一八五一年ヴェネツィアに旅行。一八五二年ローマに赴き、一八五三年ヴェネツィアに旅行。一八五四年ローマに赴き、一八五五年ヴェネツィアに旅行。一八五六年ローマに赴き、一八五七年ヴェネツィアに旅行。一八五八年ローマに赴き、一八五九年ヴェネツィアに旅行。一八六〇年ローマに赴き、一八六一年ヴェネツィアに旅行。一八六二年ローマに赴き、一八六三年ヴェネツィアに旅行。一八六四年ローマに赴き、一八六五年ヴェネツィアに旅行。一八六六年ローマに赴き、一八六七年ヴェネツィアに旅行。一八六八年ローマに赴き、一八六九年ヴェネツィアに旅行。一八七〇年ローマに赴き、一八七一年ヴェネツィアに旅行。一八七二年ローマに赴き、一八七三年ヴェネツィアに旅行。一八七四年ローマに赴き、一八七五年ヴェネツィアに旅行。一八七六年ローマに赴き、一八七七年ヴェネツィアに旅行。一八七八年ローマに赴き、一八七九年ヴェネツィアに旅行。一八八〇年ローマに赴き、一八八一年ヴェネツィアに旅行。一八八二年ローマに赴き、一八八三年ヴェネツィアに旅行。一八八四年ローマに赴き、一八八五年ヴェネツィアに旅行。一八八六年ローマに赴き、一八八七年ヴェネツィアに旅行。一八八八年ローマに赴き、一八八九年ヴェネツィアに旅行。一八九〇年ローマに赴き、一八九一年ヴェネツィアに旅行。一八九二年ローマに赴き、一八九三年ヴェネツィアに旅行。一八九四年ローマに赴き、一八九五年ヴェネツィアに旅行。一八九六年ローマに赴き、一八九七年ヴェネツィアに旅行。一八九八年ローマに赴き、一八九九年ヴェネツィアに旅行。一九〇〇年ローマに赴き、一九〇一年ヴェネツィアに旅行。一九〇二年ローマに赴き、一九〇三年ヴェネツィアに旅行。一九〇四年ローマに赴き、一九〇五年ヴェネツィアに旅行。一九〇六年ローマに赴き、一九〇七年ヴェネツィアに旅行。一九〇八年ローマに赴き、一九〇九年ヴェネツィアに旅行。一九一〇年ローマに赴き、一九一一年ヴェネツィアに旅行。一九一二年ローマに赴き、一九一三年ヴェネツィアに旅行。一九一四年ローマに赴き、一九一五年ヴェネツィアに旅行。一九一六年ローマに赴き、一九一七年ヴェネツィアに旅行。一九一八年ローマに赴き、一九一九年ヴェネツィアに旅行。一九二〇年ローマに赴き、一九二一年ヴェネツィアに旅行。一九二二年ローマに赴き、一九二三年ヴェネツィアに旅行。一九二四年ローマに赴き、一九二五年ヴェネツィアに旅行。一九二六年ローマに赴き、一九二七年ヴェネツィアに旅行。一九二八年ローマに赴き、一九二九年ヴェネツィアに旅行。一九三〇年ローマに赴き、一九三一年ヴェネツィアに旅行。一九三二年ローマに赴き、一九三三年ヴェネツィアに旅行。一九三四年ローマに赴き、一九三五年ヴェネツィアに旅行。一九三六年ローマに赴き、一九三七年ヴェネツィアに旅行。一九三八年ローマに赴き、一九三九年ヴェネツィアに旅行。一九四〇年ローマに赴き、一九四一年ヴェネツィアに旅行。一九四二年ローマに赴き、一九四三年ヴェネツィアに旅行。一九四四年ローマに赴き、一九四五年ヴェネツィアに旅行。一九四六年ローマに赴き、一九四七年ヴェネツィアに旅行。一九四八年ローマに赴き、一九四九年ヴェネツィアに旅行。一九五〇年ローマに赴き、一九五一年ヴェネツィアに旅行。一九五二年ローマに赴き、一九五三年ヴェネツィアに旅行。一九五四年ローマに赴き、一九五五年ヴェネツィアに旅行。一九五六年ローマに赴き、一九五七年ヴェネツィアに旅行。一九五八年ローマに赴き、一九五九年ヴェネツィアに旅行。一九六〇年ローマに赴き、一九六一年ヴェネツィアに旅行。一九六二年ローマに赴き、一九六三年ヴェネツィアに旅行。一九六四年ローマに赴き、一九六五年ヴェネツィアに旅行。一九六六年ローマに赴き、一九六七年ヴェネツィアに旅行。一九六八年ローマに赴き、一九六九年ヴェネツィアに旅行。一九七〇年ローマに赴き、一九七一年ヴェネツィアに旅行。一九七二年ローマに赴き、一九七三年ヴェネツィアに旅行。一九七四年ローマに赴き、一九七五年ヴェネツィアに旅行。一九七六年ローマに赴き、一九七七年ヴェネツィアに旅行。一九七八年ローマに赴き、一九七九年ヴェネツィアに旅行。一九八〇年ローマに赴き、一九八一年ヴェネツィアに旅行。一九八二年ローマに赴き、一九八三年ヴェネツィアに旅行。一九八四年ローマに赴き、一九八五年ヴェネツィアに旅行。一九八六年ローマに赴き、一九八七年ヴェネツィアに旅行。一九八八年ローマに赴き、一九八九年ヴェネツィアに旅行。一九九〇年ローマに赴き、一九九一年ヴェネツィアに旅行。一九九二年ローマに赴き、一九九三年ヴェネツィアに旅行。一九九四年ローマに赴き、一九九五年ヴェネツィアに旅行。一九九六年ローマに赴き、一九九七年ヴェネツィアに旅行。一九九八年ローマに赴き、一九九九年ヴェネツィアに旅行。二〇〇〇年ローマに赴き、二〇〇一年ヴェネツィアに旅行。二〇〇二年ローマに赴き、二〇〇三年ヴェネツィアに旅行。二〇〇四年ローマに赴き、二〇〇五年ヴェネツィアに旅行。二〇〇六年ローマに赴き、二〇〇七年ヴェネツィアに旅行。二〇〇八年ローマに赴き、二〇〇九年ヴェネツィアに旅行。二〇一〇年ローマに赴き、二〇一一年ヴェネツィアに旅行。二〇一二年ローマに赴き、二〇一三年ヴェネツィアに旅行。二〇一四年ローマに赴き、二〇一五年ヴェネツィアに旅行。二〇一六年ローマに赴き、二〇一七年ヴェネツィアに旅行。二〇一八年ローマに赴き、二〇一九年ヴェネツィアに旅行。二〇二〇年ローマに赴き、二〇二一年ヴェネツィアに旅行。二〇二二年ローマに赴き、二〇二三年ヴェネツィアに旅行。二〇二四年ローマに赴き、二〇二五年ヴェネツィアに旅行。二〇二六年ローマに赴き、二〇二七年ヴェネツィアに旅行。二〇二八年ローマに赴き、二〇二九年ヴェネツィアに旅行。二〇三〇年ローマに赴き、二〇三一年ヴェネツィアに旅行。二〇三二年ローマに赴き、二〇三三年ヴェネツィアに旅行。二〇三四年ローマに赴き、二〇三五年ヴェネツィアに旅行。二〇三六年ローマに赴き、二〇三七年ヴェネツィアに旅行。二〇三八年ローマに赴き、二〇三九年ヴェネツィアに旅行。二〇四〇年ローマに赴き、二〇四一年ヴェネツィアに旅行。二〇四二年ローマに赴き、二〇四三年ヴェネツィアに旅行。二〇四四年ローマに赴き、二〇四五年ヴェネツィアに旅行。二〇四六年ローマに赴き、二〇四七年ヴェネツィアに旅行。二〇四八年ローマに赴き、二〇四九年ヴェネツィアに旅行。二〇五〇年ローマに赴き、二〇五一年ヴェネツィアに旅行。二〇五二年ローマに赴き、二〇五三年ヴェネツィアに旅行。二〇五四年ローマに赴き、二〇五五年ヴェネツィアに旅行。二〇五六年ローマに赴き、二〇五七年ヴェネツィアに旅行。二〇五八年ローマに赴き、二〇五九年ヴェネツィアに旅行。二〇六〇年ローマに赴き、二〇六一年ヴェネツィアに旅行。二〇六二年ローマに赴き、二〇六三年ヴェネツィアに旅行。二〇六四年ローマに赴き、二〇六五年ヴェネツィアに旅行。二〇六六年ローマに赴き、二〇六七年ヴェネツィアに旅行。二〇六八年ローマに赴き、二〇六九年ヴェネツィアに旅行。二〇七〇年ローマに赴き、二〇七一年ヴェネツィアに旅行。二〇七二年ローマに赴き、二〇七三年ヴェネツィアに旅行。二〇七四年ローマに赴き、二〇七五年ヴェネツィアに旅行。二〇七六年ローマに赴き、二〇七七年ヴェネツィアに旅行。二〇七八年ローマに赴き、二〇七九年ヴェネツィアに旅行。二〇八〇年ローマに赴き、二〇八一年ヴェネツィアに旅行。二〇八二年ローマに赴き、二〇八三年ヴェネツィアに旅行。二〇八四年ローマに赴き、二〇八五年ヴェネツィアに旅行。二〇八六年ローマに赴き、二〇八七年ヴェネツィアに旅行。二〇八八年ローマに赴き、二〇八九年ヴェネツィアに旅行。二〇九〇年ローマに赴き、二〇九一年ヴェネツィアに旅行。二〇九二年ローマに赴き、二〇九三年ヴェネツィアに旅行。二〇九四年ローマに赴き、二〇九五年ヴェネツィアに旅行。二〇九六年ローマに赴き、二〇九七年ヴェネツィアに旅行。二〇九八年ローマに赴き、二〇九九年ヴェネツィアに旅行。二一〇〇年ローマに赴き、二一〇一年ヴェネツィアに旅行。二一〇二年ローマに赴き、二一〇三年ヴェネツィアに旅行。二一〇四年ローマに赴き、二一〇五年ヴェネツィアに旅行。二一〇六年ローマに赴き、二一〇七年ヴェネツィアに旅行。二一〇八年ローマに赴き、二一〇九年ヴェネツィアに旅行。二一一〇年ローマに赴き、二一一一年ヴェネツィアに旅行。二一一二年ローマに赴き、二一一三年ヴェネツィアに旅行。二一一四年ローマに赴き、二一一五年ヴェネツィアに旅行。二一一六年ローマに赴き、二一一七年ヴェネツィアに旅行。二一一八年ローマに赴き、二一一九年ヴェネツィアに旅行。二一二〇年ローマに赴き、二一二一年ヴェネツィアに旅行。二一二二年ローマに赴き、二一二三年ヴェネツィアに旅行。二一二四年ローマに赴き、二一二五年ヴェネツィアに旅行。二一二六年ローマに赴き、二一二七年ヴェネツィアに旅行。二一二八年ローマに赴き、二一二九年ヴェネツィアに旅行。二一三〇年ローマに赴き、二一三一年ヴェネツィアに旅行。二一三二年ローマに赴き、二一三三年ヴェネツィアに旅行。二一三四年ローマに赴き、二一三五年ヴェネツィアに旅行。二一三六年ローマに赴き、二一三七年ヴェネツィアに旅行。二一三八年ローマに赴き、二一三九年ヴェネツィアに旅行。二一四〇年ローマに赴き、二一四一年ヴェネツィアに旅行。二一四二年ローマに赴き、二一四三年ヴェネツィアに旅行。二一四四年ローマに赴き、二一四五年ヴェネツィアに旅行。二一四六年ローマに赴き、二一四七年ヴェネツィアに旅行。二一四八年ローマに赴き、二一四九年ヴェネツィアに旅行。二一五〇年ローマに赴き、二一五一年ヴェネツィアに旅行。二一五二年ローマに赴き、二一五三年ヴェネツィアに旅行。二一五四年ローマに赴き、二一五五年ヴェネツィアに旅行。二一五六年ローマに赴き、二一五七年ヴェネツィアに旅行。二一五八年ローマに赴き、二一五九年ヴェネツィアに旅行。二一六〇年ローマに赴き、二一六一年ヴェネツィアに旅行。二一六二年ローマに赴き、二一六三年ヴェネツィアに旅行。二一六四年ローマに赴き、二一六五年ヴェネツィアに旅行。二一六六年ローマに赴き、二一六七年ヴェネツィアに旅行。二一六八年ローマに赴き、二一六九年ヴェネツィアに旅行。二一七〇年ローマに赴き、二一七一年ヴェネツィアに旅行。二一七二年ローマに赴き、二一七三年ヴェネツィアに旅行。二一七四年ローマに赴き、二一七五年ヴェネツィアに旅行。二一七六年ローマに赴き、二一七七年ヴェネツィアに旅行。二一七八年ローマに赴き、二一七九年ヴェネツィアに旅行。二一八〇年ローマに赴き、二一八一年ヴェネツィアに旅行。二一八二年ローマに赴き、二一八三年ヴェネツィアに旅行。二一八四年ローマに赴き、二一八五年ヴェネツィアに旅行。二一八六年ローマに赴き、二一八七年ヴェネツィアに旅行。二一八八年ローマに赴き、二一八九年ヴェネツィアに旅行。二一九〇年ローマに赴き、二一九一年ヴェネツィアに旅行。二一九二年ローマに赴き、二一九三年ヴェネツィアに旅行。二一九四年ローマに赴き、二一九五年ヴェネツィアに旅行。二一九六年ローマに赴き、二一九七年ヴェネツィアに旅行。二一九八年ローマに赴き、二一九九年ヴェネツィアに旅行。二二〇〇年ローマに赴き、二二〇一年ヴェネツィアに旅行。二二〇二年ローマに赴き、二二〇三年ヴェネツィアに旅行。二二〇四年ローマに赴き、二二〇五年ヴェネツィアに旅行。二二〇六年ローマに赴き、二二〇七年ヴェネツィアに旅行。二二〇八年ローマに赴き、二二〇九年ヴェネツィアに旅行。二二一〇年ローマに赴き、二二一一年ヴェネツィアに旅行。二二一二年ローマに赴き、二二一三年ヴェネツィアに旅行。二二一四年ローマに赴き、二二一五年ヴェネツィアに旅行。二二一六年ローマに赴き、二二一七年ヴェネツィアに旅行。二二一八年ローマに赴き、二二一九年ヴェネツィアに旅行。二二二〇年ローマに赴き、二二二一年ヴェネツィアに旅行。二二二二年ローマに赴き、二二二三年ヴェネツィアに旅行。二二二四年ローマに赴き、二二二五年ヴェネツィアに旅行。二二二六年ローマに赴き、二二二七年ヴェネツィアに旅行。二二二八年ローマに赴き、二二二九年ヴェネツィアに旅行。二二三〇年ローマに赴き、二二三一年ヴェネツィアに旅行。二二三二年ローマに赴き、二二三三年ヴェネツィアに旅行。二二三四年ローマに赴き、二二三五年ヴェネツィアに旅行。二二三六年ローマに赴き、二二三七年ヴェネツィアに旅行。二二三八年ローマに赴き、二二三九年ヴェネツィアに旅行。二二四〇年ローマに赴き、二二四一年ヴェネツィアに旅行。二二四二年ローマに赴き、二二四三年ヴェネツィアに旅行。二二四四年ローマに赴き、二二四五年ヴェネツィアに旅行。二二四六年ローマに赴き、二二四七年ヴェネツィアに旅行。二二四八年ローマに赴き、二二四九年ヴェネツィアに旅行。二二五〇年ローマに赴き、二二五一年ヴェネツィアに旅行。二二五二年ローマに赴き、二二五三年ヴェネツィアに旅行。二二五四年ローマに赴き、二二五五年ヴェネツィアに旅行。二二五六年ローマに赴き、二二五七年ヴェネツィアに旅行。二二五八年ローマに赴き、二二五九年ヴェネツィアに旅行。二二六〇年ローマに赴き、二二六一年ヴェネツィアに旅行。二二六二年ローマに赴き、二二六三年ヴェネツィアに旅行。二二六四年ローマに赴き、二二六五年ヴェネツィアに旅行。二二六六年ローマに赴き、二二六七年ヴェネツィアに旅行。二二六八年ローマに赴き、二二六九年ヴェネツィアに旅行。二二七〇年ローマに赴き、二二七一年ヴェネツィアに旅行。二二七二年ローマに赴き、二二七三年ヴェネツィアに旅行。二二七四年ローマに赴き、二二七五年ヴェネツィアに旅行。二二七六年ローマに赴き、二二七七年ヴェネツィアに旅行。二二七八年ローマに赴き、二二七九年ヴェネツィアに旅行。二二八〇年ローマに赴き、二二八一年ヴェネツィアに旅行。二二八二年ローマに赴き、二二八三年ヴェネツィアに旅行。二二八四年ローマに赴き、二二八五年ヴェネツィアに旅行。二二八六年ローマに赴き、二二八七年ヴェネツィアに旅行。二二八八年ローマに赴き、二二八九年ヴェネツィアに旅行。二二九〇年ローマに赴き、二二九一年ヴェネツィアに旅行。二二九二年ローマに赴き、二二九三年ヴェネツィアに旅行。二二九四年ローマに赴き、二二九五年ヴェネツィアに旅行。二二九六年ローマに赴き、二二九七年ヴェネツィアに旅行。二二九八年ローマに赴き、二二九九年ヴェネツィアに旅行。二三〇〇年ローマに赴き、二三〇一年ヴェネツィアに旅行。二三〇二年ローマに赴き、二三〇三年ヴェネツィアに旅行。二三〇四年ローマに赴き、二三〇五年ヴェネツィアに旅行。二三〇六年ローマに赴き、二三〇七年ヴェネツィアに旅行。二三〇八年ローマに赴き、二三〇九年ヴェネツィアに旅行。二三一〇年ローマに赴き、二三一一年ヴェネツィアに旅行。二三一二年ローマに赴き、二三一三年ヴェネツィアに旅行。二三一四年ローマに赴き、二三一五年ヴェネツィアに旅行。二三一六年ローマに赴き、二三一七年ヴェネツィアに旅行。二三一八年ローマに赴き、二三一九年ヴェネツィアに旅行。二三二〇年ローマに赴き、二三二一年ヴェネツィアに旅行。二三二二年ローマに赴き、二三二三年ヴェネツィアに旅行。二三二四年ローマに赴き、二三二五年ヴェネツィアに旅行。二三二六年ローマに赴き、二三二七年ヴェネツィアに旅行。二三二八年ローマに赴き、二三二九年ヴェネツィアに旅行。二三三〇年ローマに赴き、二三三一年ヴェネツィアに旅行。二三三二年ローマに赴き、二三三三年ヴェネツィアに旅行。二三三四年ローマに赴き、二三三五年ヴェネツィアに旅行。二三三六年ローマに赴き、二三三七年ヴェネツィアに旅行。二三三八年ローマに赴き、二三三九年ヴェネツィアに旅行。二三四〇年ローマに赴き、二三四一年ヴェネツィアに旅行。二三四二年ローマに赴き、二三四三年ヴェネツィアに旅行。二三四四年ローマに赴き、二三四五年ヴェネツィアに旅行。二三四六年ローマに赴き、二三四七年ヴェネツィアに旅行。二三四八年ローマに赴き、二三四九年ヴェネツィアに旅行。二三五〇年ローマに赴き、二三五一年ヴェネツィアに旅行。二三五二年ローマに赴き、二三五三年ヴェネツィアに旅行。二三五四年ローマに赴き、二三五五年ヴェネツィアに旅行。二三五六年ローマに赴き、二三五七年ヴェネツィアに旅行。二三五八年ローマに赴き、二三五九年ヴェネツィアに旅行。二三六〇年ローマに赴き、二三六一年ヴェネツィアに旅行。二三六二年ローマに赴き、二三六三年ヴェネツィアに旅行。二三六四年ローマに赴き、二三六五年ヴェネツィアに旅行。二三六六年ローマに赴き、二三六七年ヴェネツィアに旅行。二三六八年ローマに赴き、二三六九年ヴェネツィアに旅行。二三七〇年ローマに赴き、二三七一年ヴェネツィアに旅行。二三七二年ローマに赴き、二三七三年ヴェネツィアに旅行。二三七四年ローマに赴き、二三七五年ヴェネツィアに旅行。二三七六年ローマに赴き、二三七七年ヴェネツィアに旅行。二三七八年ローマに赴き、二三七九年ヴェネツィアに旅行。二三八〇年ローマに赴き、二三八一年ヴェネツィアに旅行。二三八二年ローマに赴き、二三八三年ヴェネツィアに旅行。二三八四年ローマに赴き、二三八五年ヴェネツィアに旅行。二三八六年ローマに赴き、二三八七年ヴェネツィアに旅行。二三八八年ローマに赴き、二三八九年ヴェネツィアに旅行。二三九〇年ローマに赴き、二三九一年ヴェネツィアに旅行。二三九二年ローマに赴き、二三九三年ヴェネツィアに旅行。二三九四年ローマに赴き、二三九五年ヴェネツィアに旅行。二三九六年ローマに赴き、二三九七年ヴェネツィアに旅行。二三九八年ローマに赴き、二三九九年ヴェネツィアに旅行。二四〇〇年ローマに赴き、二四〇一年ヴェネツィアに旅行。二四〇二年ローマに赴き、二四〇三年ヴェネツィアに旅行。二四〇四年ローマに赴き、二四〇五年ヴェネツィアに旅行。二四〇六年ローマに赴き、二四〇七年ヴェネツィアに旅行。二四〇八年ローマに赴き、二四〇九年ヴェネツィアに旅行。二四一〇年ローマに赴き、二四一一年ヴェネツィアに旅行。二四一二年ローマに赴き、二四一三年ヴェネツィアに旅行。二四一四年ローマに赴き、二四一五年ヴェネツィアに旅行。二四一六年ローマに赴き、二四一七年ヴェネツィアに旅行。二四一八年ローマに赴き、二四一九年ヴェネツィアに旅行。二四二〇年ローマに赴き、二四二一年ヴェネツィアに旅行。二四二二年ローマに赴き、二四二三年ヴェネツィアに旅行。二四二四年ローマに赴き、二四二五年ヴェネツィアに旅行。二四二六年ローマに赴き、二四二七年ヴェネツィアに旅行。二四二八年ローマに赴き、二四二九年ヴェネツィアに旅行。二四三〇年ローマに赴き、二四三一年ヴェネツィアに旅行。二四三二年ローマに赴き、二四三三年ヴェネツィアに旅行。二四三四年ローマに赴き、二四三五年ヴェネツィアに旅行。二四三六年ローマに赴き、二四三七年ヴェネツィアに旅行。二四三八年ローマに赴き、二四三九年ヴェネツィアに旅行。二四四〇年ローマに赴き、二四四一年ヴェネツィアに旅行。二四四二年ローマに赴き、二四四三年ヴェネツィアに旅行。二四四四年ローマに赴き、二四四五年ヴェネツィアに旅行。二四四六年ローマに赴き、二四四七年ヴェネツィアに旅行。二四四八年ローマに赴き、二四四九年ヴェネツィアに旅行。二四五〇年ローマに赴き、二四五一年ヴェネツィアに旅行。二四五二年ローマに赴き、二四五三年ヴェネツィアに旅行。二四五四年ローマに赴き、二四五五年ヴェネツィアに旅行。二四五六年ローマに赴き、二四五七年ヴェネツィアに旅行。二四五八年ローマに赴き、二四五九年ヴェネツィアに旅行。二四六〇年ローマに赴き、二四六一年ヴェネツィアに旅行。二四六二年ローマに赴き、二四六三年ヴェネツィアに旅行。二四六四年ローマに赴き、二四六五年ヴェネツィアに旅行。二四六六年ローマに赴き、二四六七年ヴェネツィアに旅行。二四六八年ローマに赴き、二四六九年ヴェネツィアに旅行。二四七〇年ローマに赴き、二四七一年ヴェネツィアに旅行。二四七二年ローマに赴き、二四七三年ヴェネツィアに旅行。二四七四年ローマに赴き、二四七五年ヴェネツィアに旅行。二四七六年ローマに赴き、二四七七年ヴェネツィアに旅行。二四七八年ローマに赴き、二四七九年ヴェネツィアに旅行。二四八〇年ローマに赴き、二四八一年ヴェネツィアに旅行。二四八二年ローマに赴き、二四八三年ヴェネツィアに旅行。二四八四年ローマに赴き、二四八五年ヴェネツィアに旅行。二四八六年ローマに赴き、二四八七年ヴェネツィアに旅行。二四八八年ローマに赴き、二四八九年ヴェネツィアに旅行。二四九〇年ローマに赴き、二四九一年ヴェネツィアに旅行。二四九二年ローマに赴き、二四九三年ヴェネツィアに旅行。二四九四年ローマに赴き、二四九五年ヴェネツィアに旅行。二四九六年ローマに赴き、二四九七年ヴェネツィアに旅行。二四九八年ローマに赴き、二四九九年ヴェネツィアに旅行。二五

——帝國主義研究——

明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
　　南洋群島の研究
　　帝國主義研究
　　日本の傷を醫す者
著

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄

發行者　東京都千代田區神田神保町三ノ二
　　增永與吉
印刷者　東京都千代田區九段二丁目一
　　保科清泰
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二
　　株式會社　白日書院
　　電話九段四三五八番

本製川桂・印刷社會式株業工刷印本日

——帝國主義研究——

明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
　　南洋群島の研究
　　帝國主義研究
　　日本の傷を醫す者
著

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄

發行者　東京都千代田區神田神保町三ノ二
　　增永與吉
印刷者　東京都千代田區九段二丁目一
　　保科清泰
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二
　　株式會社　白日書院
　　電話九段四三五八番

本製川桂・印刷社會式株業工刷印本日

挿入文書

ジオヴィオ 3.

アルフォンソ・デステ、グラン・カピターノ及びペスカラ侯に関するもの。又、レオ十世、アドリアノ六世及びポンペオ・コロンナ枢機卿の傳記、及び二組の頌徳文、virorum bellica virtute illustrium et virorum literis illustrium quotquot vel nostra vel avorum memoria vixere（共に当初は前記博物館の多くの肖像の説明書用にものされたもの）がある。

Historiarum sui temporis libri XLV（初版フローレンス 一五五〇―五二年）は 三十年余を費した大作で、千ヤールス八世の遠征から一五四七年迄を取扱ってあるが、この中 最初の十冊は実は書かれてゐない。これら多くの作品により、ルネサンス・イタリアの史料編纂家として第一流の地位を占めるが、彼は、戦史、雄弁、文学、文化一般にのみ興味をもち、古典の範囲の情報で知り得た事実をたくみに語る事に満足し、政治組織を造ったり、諸制度、その機構その運用方法を研究する事には関心を持たなかった様である。

ジオヴィオ 4

ラテン学者としての十分な経験を活用してその著作にあたり、「史」でなく傳記や頌徳文の中で人の名声や徳をたたへる事に集中し、復讐を受けそうな誹謗の記述を避けたが、その為かえって後日不誠実、金次第、追従等の根拠を招き、生前も多くの誤解を受けた。しかし彼の著作中に少くとも一五三〇年迄は事実の変造は行はれて居ず、更に、より正確な情報を提供し、スペイン年代記作者に苦い真実を教へることのあったのも彼の作品の批判的研究によりあきらかである。パストールは彼の書いたアドリアノ六世傳記を諷刺文そのものと評してある。

——帝國主義研究——

歷　明二六生　東大法學部卒
　　現職　東大經濟學部教授
略　植民及植民政策
　　著書　南洋群島の研究
著者　帝國主義研究
　　日本の傷を醫す者
著

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄
發行者　增永要吉
印刷者　保科清泰
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院　電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・挂川製本

——帝國主義研究——

歷　明二六生　東大法學部卒
　　現職　東大經濟學部教授
略　植民及植民政策
　　著書　南洋群島の研究
著者　帝國主義研究
　　日本の傷を醫す者
著

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢內原忠雄
發行者　增永要吉
印刷者　保科清泰
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院　電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・挂川製本

挿入文書

matrimonio di Caterina de' Medici col futuro Enrico II di Francia e ricevette una pensione da Francesco I; nel 1535 fu a Napoli, ove ammirò il trionfo di Carlo V, reduce dall'impresa tunisina; nel 1536, dopo viaggi a Parma, Siena, Firenze e Pisa (presso Alessandro de' Medici), cominciò a costruire a Como, sulla riva del Lario, il bel palazzo, ricco di giardini e di affreschi (particolarmente del suo amico Vasari, ch'egli incitò e aiutò a scrivere le Vite degli artisti) e destinato a contenere il suo famoso museo, a cui concorsero sovrani, prelati e uomini insigni d'ogni parte d'Europa col dono di ritratti, cammei, rarità e curiosità d'ogni sorta e d'ogni paese (anche del nuovo mondo); nel 1538 accompagnò Paolo III a Nizza e andò a Villeneuve in Provenza per vedere Francesco I; nel 1541 era a Milano per le feste a Carlo V; nel 1551 si trasferì a Firenze, accolto dal suo amico e protettore Cosimo I.

Roramente in italiano, molto più spesso nel suo «latino d'oro», quasi sempre volgarizzato poi da Lodovico Domenichi, scrisse, tra molte altre opere, queste più famose: i Commentari delle cose de' Turchi (Venezia 1531), riedite in latino (Witten-berg 1537) col titolo De rebus gestis et vitis imperatorum Turcarum, da Osman a Solimano II; molte Vitae, talune pubblicate isolatamente, talune raccolte nel 1549 a Firenze, e

カテリナ・デ・メディチと後の仏王ヘンリー二世との結婚式に参列し、フランシス一世から年金を受けた。1535年ナポリにあり、チュニス遠征から凱旋したカール五世を賛讃した。パルマ、シエナ、フローレンス、ピサ（アレッサンドロ・デ・メディチの下）を旅行したのち、1536年コーモでうりオリ岸に美麗な屋敷を建築し始めた。この屋敷は庭と壁画（特に彼の友人ヴァサーリのもので、彼がヴァサーリに「名匠列傳」を書くことをすすめ、これを助けたのである）があり、又彼の有名な博物館を収容する目的をもつてゐて、これに対し諸帝王、聖職者、ヨーロッパ各地の著名人が肖像、浮彫貝殻、各国（新世界を含む）の各種の珍な珍品を贈った。1538年パオロ三世をローマにともなひ、フランシス一世に会ふためにプロヴァンスのニース（Nizza）に行った。1541年にはカール五世の視察のためミラノにあり、1551年フローレンスに特住し、彼の友人であり保護者であるコジモ一世より迎へられた。

彼のイタリア語の著述はまれで、文章ラテン語で（これはその後ロドヴィコ・ドメニキにより「黄金ラテン」？ますます俗化された）書いたものが多いが、その中で次のものが有名である。「トルコ人の諸事に関する釈義」（1531年ヴェネチアで出版）これがラテン語で再版され（1537年ウイッテンベルヒにて）名称は De rebus gestis et vitis imperatorum Turcarum（著作はオスマン帝からソリマーノ二世までのトルコ帝の生涯）である。この外多くの Vitae（傳記）があり、あるものは個別に、あるものは1549年フローレンスで集録され、

tutte poi in Opera omnia (Basilea 1578), cioè quelle dei dodici Visconti di Milano, fino a Filippo Maria, che nella prima edizione (Parigi 1549) sono accompagnate da eccellenti ritratti, e quelle di Alfonso d'Este, del Gran Capitano, del marchese di Pescara (queste due ultime edite, nella versione del Domenichi, da C. Panigada, Bari 1931), di Leone X, di Adriano VI e del card. Pompeo Colonna; due serie di Elogia: quelli virorum bellica virtute illustrium e quelli virorum literis illustrium quotquot vel nostra vel avorum memoria vixere, gli uni e gli altri destinati originariamente a servire da testi esplicativi ai ritratti del Museo anzidetto, ma pubblicati prima mente (Firenze 1548) senza illustrazioni grafiche, e soltanto nelle edizioni postume di Basilea (1575 e 1577) corredati di pessime incisioni in legno; e, opera sua maggiore, che lo occupò oltre trent'anni (fino al 1549), gli Historiarum sui temporis libri XLV (I^a ediz., Firenze 1550—2), dalla spedizione di Carlo VIII al 1547, dei quali libri, peraltro, i primi dieci non furono mai scritti (che i primi sei andassero perduti nel sacco di Roma sembra una storiella messa in giro dal G. medesimo, desideroso che l'opera sua, per la quale compilò egli stesso periochae, somigliasse, anche per la frammentarietà, a quella liviana). Da questo complesso di lavori, che gli assicurano un posto di prim'ordine nella storiografia italiana del Rinascimento, appare che egli,

これらすべてがその後全集に合本された（1578年バーゼルで出版）。即ちフィリッポ・マリアまでのミラノのヴィスコンティ家の12名に関したもので、初版（1549年、パリ）にはすぐれた肖像がついてゐた。この外アルフォンソ・デステ、グラン・カピターノ及びペスカラ侯に関したものがある。（この中最後の二つはドメニキの繙訳によって、1931年バーリのC・パニガダから出版されてゐる）。この外レオ十世、アドリアノ六世及びポンペオ・コロンナ枢機卿の傳記がある。また二組の頌徳文がある、即ち、virorum bellica virtute illustrium（軍事的功績輝しき人々）と virorum literis illustrium quotquot vel nostra vel avorum memoria vixere（輝しき文人達（知れるにすくとも我等或は祖先の記憶に生くる？））であり、両者とも当初は前記博物館の多くの肖像の説明書に使用される筈のものであった。しかし先づ（1548年フローレンスで）図解なしに出版され、やっと彼の死後バーゼルで（1575年と1577年）出版され、これには非常に不完全な木版画がついてゐる。彼が三十年以上かゝった（1549年迄）大作は Historiarum sui temporis libri XLV（初版はフローレンス 1550—52刊であって、チャールス八世の遠征から1547年迄を取扱ってゐる。しかしこの中最初の10冊は書かれてゐない（最初の6冊がドイツ軍のローマ掠奪の際失はれたと云ふのは、著者自身が流布した噂のやうで、彼自身で periochae を編集したその作品が今数（断章）ティト・リヴィオのものに似ることを希望したのである。）ルネッサンス・イタリヤの史料編纂家の中で、彼に第一流の地位を確保するこれら多くの作品から見ると、

curioso esclusivamente della storia militare e di quella dell'eloquenza o della letteratura e cultura in genere, e pago di raccontare con artistica vivacità i fatti di cui veniva a conoscenza mercé una larghissima informazione, non ebbe altri interessamenti e altre attitudini; e, p. es., non si travagliò a formarsi un sistema politico; curò così poco di studiare le istituzioni, i loro congegni e il loro modo di operare da non conoscere nemmeno gli ordinamenti della repubblica fiorentina; si contentò di lamentare, rassegnato, la perduta indipendenza d'Italia e di esortare i principi cristiani, smesse le loro lotte reciproche, a movere concordi contro i Turchi e via enumerando. E certamente anch'egli, come tanti storici di quei tempi, attese e sollecitò pensioni e doni; evitò racconti scandalosi, che gli avrebbero attirato vendette; s'avvalse della sua consumata perizia di latinista per accentuare nelle Vitae e negli Elogia (ma non nelle Historiae) pregi e virtù degli elogiati e attenuare difetti e vizî; e, malgrado la sua accuratezza, cadde in errori di fatto. Ma da ciò alle accuse di dilettantismo giornalistico, di mala-fede, di venalità, di adulazione e, peggio, di ricatti, corre non poco. Tanto più che siffatte accuse, formulate quasi tutte fin dai suoi tempi, segnatamente da storici che

特に戦史、雄辯、文学、文化一般に好奇心をもち、広範囲の情報で知り得た事実をたくみに語って満足してみる彼は、別の関心又は性向を持たなかったやうである。例へば政治組織を造る苦労をしなかった。諸制度、その機構その運用方法もあまり研究しなかった。その結果フローレンス共和国の制度を知ってみない。たゞ諦めて、イタリアの独立喪失を嘆き、キリスト教君主に相互の争ひをやめ、一致してトルコ人にあたれと勧告しただけであった。それから確かに彼もこの時代の歴史家と同様、年金や贈物を期待し催促した。また復讐を受けそうな誹謗の記述をさせた。ラテン学者としての十分な経験を活用して、その著作に当り、歴史でない、傳記や頌徳文の中で称讃される人の名声や徳をたゝへる事に集中し、缺点や悪徳の追求の手をゆるめた。しかし彼の慎重さに拘らず、実際に間違ってみたのである。そしてこのことから、好事的ジャーナリズムの非難や、不誠実、金次第、追従更に猥褻りたとえ誹謗が少からず起ってみる。いずれにしても これらの非難は彼の生存中からあったもので、

valevano meno di lui e si avvalsero parecchio delle sue fatiche (B. Varchi, B. Segni, ecc.), non hanno altro fondamento che un'interpretazione errata per soverchia letteralità di brani scherzosi delle sue lettere private (raccolte e pubblicate nel 1605 dal Domenichi). Anzi da un esame critico delle sue opere è risultato, p. es., che per lo meno fino al 1530 nessuna alterazione di fatti si riscontra nei racconti gioviani; che nelle Vitae del Gran Capitano e del marchese di Pescara egli è meglio informato dei cronisti spagnoli; che anche nelle Vitae dei suoi mecenati e stipendiatori seppe dire loro talvolta amare verità (la Vita di Adriano VI è giudicata dal Pastor addirittura una satira); e che perfino nei riguardi di Carlo V non esitò a porre in rilievo, pur essendo l'imperatore ancora vivo, quanto gli Spagnoli si sentissero oppressi dalla presenza di quel monarca e quanto desiderassero di vederlo da loro lontano.

(Enciclopedia Italiana, XVII, P. 277—8)

特に彼等の価値がなく、彼の著作を多く利用した歴史家（B. ヴァルキ、B. セーニ其他）によって造られたもので、彼の書簡の冗談の部分の大ざっぱな表現をあやまって解釈したために外ならない（書簡は1605年ドメニキにより蒐集されて出版された）。それどころか彼の作品の批判的研究によると、例へば少くとも1530年迄著者の記述の中に事実の変造は行はれてゐない。グラン・カピターノとペスカラ侯の傳記の中では、スペインの年代記作者に比較してより正確な情報を持つてゐるし又その後援者及び俸給支拂者の傳記の中で、スペイン年代記作者に時には苦い真実を教へることが出来た。（アドリアーノ6世の傳記をパストールは諷刺文そのものと判断してゐる）。又カール五世についても、また皇帝は在命中だったがスペイン人がどんなにあの皇帝（カール五世）の存在によって圧迫を感じてゐるか、また皇帝を遠方から見ることを希望したかをちうちよせずに明かにしたのであった。

50. Grew, Nehemiah, 1641 — 1712.

vegetable physiologist. Rev. Ordained. Grew (ｼｭﾄ: master of Catherine grammar school) の3. Cambridge の Pembroke Hall に入る. 1661 年 B.A. となる. 1664年. Idemtes と Amomales とは同じ「ｼｭﾄﾞ」に ｼｭﾄﾞｽﾄﾗｸﾁｬｽ の発表を基礎として, 1670年. 植物解剖学の始祖 と称される. 1673 年には, 前年ｼｭﾄﾞﾄｽ で発表した, An Idea of a Phytological History propounded, with a Continuation of the Anatomy of Vegetables, particularly prosecuted upon Roots. And an Account of the Vegetation of Roots chiefly grounded thereupon' という題で, Royal Society の会員に選ばれる. 1677年 Oxford の Nehemiah Grew, M.D. ｼｭﾄﾞ 植物解剖学の始祖 と称される. 1682年. ｼｭﾄﾞ a curious (or the anatomy of plants) という. 1675年. 'The Comparative Anatomy of Stomaches, with an Account of their Vegetation compared with that of Plants.' ―ﾈﾝ. chemical factors ｼｭﾄﾞｽﾄﾗｸﾁｬｽ という発表に. 'Of the Nature, Causes, and Power of Nutrition' という発表に. 1674年, 'A Discourse of the Diversities and Causes of Tastes chiefly in Plants' (1675年3月); 'An Essay of the

こｼｭﾄﾞｽﾄﾗｸﾁｬｽ, この書の, 1671年12月7日 (Marcello Malpighi に送る 同じ「ｼｭﾄﾞ」の解剖学の始祖 Marcello Malpighi に対して, 1672年 ﾛﾝﾄﾞﾝ Royal Society の会員に選ばれる. 1677年6月 William's 宛ての書簡 と共に, 1672年 ﾛﾝﾄﾞﾝ (Buv) に送られる. この書の, 1671年12月7日 (Marcello Malpighi に送る 同じ「ｼｭﾄﾞ」の解剖学の始祖 Marcello Malpighi に対して, 1672年 ﾛﾝﾄﾞﾝ (Buv) に送られる.

植物解剖学の始祖 と称される. ―ﾆﾍｺﾞﾛ

Nehemiah Grew, 1641 — 1712.

植物生理学者. Cambridge の Pembroke Hall に入る. 1661年 B.A. となる. 1664年. Idemtes と Amomales とは同じ「ｼｭﾄﾞ」に 属する植物 と称される. 1673年には, 前年ｼｭﾄﾞﾄｽ で発表した, An Idea of a Phytological History propounded, with a Continuation of the Anatomy of Vegetables, particularly prosecuted upon Roots. And an Account of the Vegetation of Roots chiefly grounded thereupon' という題で, Royal Society の会員に選ばれる. 1677年 Oxford の Nehemiah Grew, M.D. ｼｭﾄﾞ 植物解剖学の始祖 と称される. 1682年. ｼｭﾄﾞ a curious (or the anatomy of plants) という. 1675年. 'The Comparative Anatomy of Stomaches, with an Account of their Vegetation compared with that of Plants.' ―ﾈﾝ. chemical factors ｼｭﾄﾞｽﾄﾗｸﾁｬｽ という発表に. 'Of the Nature, Causes, and Power of Nutrition' という発表に. 1674年, 'A Discourse of the Diversities and Causes of Tastes chiefly in Plants' (1675年3月); 'An Essay of the

植物生理学者. Cambridge の Pembroke Hall に入る. 1661年 B.A. となる. 1664年. Idemtes と Amomales とは同じ「ｼｭﾄﾞ」に 属する植物 と称される. 1673年には, 前年ｼｭﾄﾞﾄｽ で発表した, An Idea of a Phytological History propounded, with a Continuation of the Anatomy of Vegetables, particularly prosecuted upon Roots. And an Account of the Vegetation of Roots chiefly grounded thereupon' という題で, Royal Society の会員に選ばれる. 1677年 Oxford の Nehemiah Grew, M.D. ｼｭﾄﾞ 植物解剖学の始祖 と称される. 1682年. ｼｭﾄﾞ a curious (or the anatomy of plants) という. 1675年. 'The Comparative Anatomy of Stomaches, with an Account of their Vegetation compared with that of Plants.' ―ﾈﾝ. chemical factors ｼｭﾄﾞｽﾄﾗｸﾁｬｽ という発表に. 'Of the Nature, Causes, and Power of Nutrition' という発表に. 1674年, 'A Discourse of the Diversities and Causes of Tastes chiefly in Plants' (1675年3月); 'An Essay of the

植物生理学者. Cambridge の Pembroke Hall に入る. 1661年 B.A. となる. 1664年. Idemtes と Amomales とは同じ「ｼｭﾄﾞ」に 属する植物 と称される. 1673年には, 前年ｼｭﾄﾞﾄｽ で発表した, An Idea of a Phytological History propounded, with a Continuation of the Anatomy of Vegetables, particularly prosecuted upon Roots. And an Account of the Vegetation of Roots chiefly grounded thereupon' という題で, Royal Society の会員に選ばれる. 1677年 Oxford の Nehemiah Grew, M.D. ｼｭﾄﾞ 植物解剖学の始祖 と称される. 1682年. ｼｭﾄﾞ a curious (or the anatomy of plants) という. 1675年. 'The Comparative Anatomy of Stomaches, with an Account of their Vegetation compared with that of Plants.' ―ﾈﾝ. chemical factors ｼｭﾄﾞｽﾄﾗｸﾁｬｽ という発表に. 'Of the Nature, Causes, and Power of Nutrition' という発表に. 1674年, 'A Discourse of the Diversities and Causes of Tastes chiefly in Plants' (1675年3月); 'An Essay of the

植物生理学者. Cambridge の Pembroke Hall に入る. 1661年 B.A. となる. 1664年. Idemtes と Amomales とは同じ「ｼｭﾄﾞ」に 属する植物 と称される. 1673年には, 前年ｼｭﾄﾞﾄｽ で発表した, An Idea of a Phytological History propounded, with a Continuation of the Anatomy of Vegetables, particularly prosecuted upon Roots. And an Account of the Vegetation of Roots chiefly grounded thereupon' という題で, Royal Society の会員に選ばれる. 1677年 Oxford の Nehemiah Grew, M.D. ｼｭﾄﾞ 植物解剖学の始祖 と称される. 1682年. ｼｭﾄﾞ a curious (or the anatomy of plants) という. 1675年. 'The Comparative Anatomy of Stomaches, with an Account of their Vegetation compared with that of Plants.' ―ﾈﾝ. chemical factors ｼｭﾄﾞｽﾄﾗｸﾁｬｽ という発表に. 'Of the Nature, Causes, and Power of Nutrition' という発表に. 1674年, 'A Discourse of the Diversities and Causes of Tastes chiefly in Plants' (1675年3月); 'An Essay of the

50. Grew, Nehemiah, 1641 — 1712.

vegetable physiologist。 Rev. Obadiah Grew (当時は、master of Atherstone grammar school) の子。 Cambridge の Pem-broke Hall に学び、1661年 B.A. として卒業。1664年、plants と animals とは同じ「御手」によって創られたものである事を思い、それらの structures の類似を推論して、vegetable anatomy の研究を始めた。1670年、それに関する essay を書いたが、それが Bishop Wilkins によって Royal Society で発表され、1671年印刷され、彼は Royal Society の fellow に選ばれた。一方、その少し前、Leyden で M.D. の学位を得た。

彼の preliminary essay 'The Anatomy of Vegetables begun with a General Account of Vegetation grounded thereon' は、1671年6月附せの Wilkins 宛書簡を附し、1672年出版された (8vo)。これでみると、この書が1671年12月7日 (Marcello Malpighi による同じ方向の研究が原稿で学士会に提出された日) には、既に印刷になっていた事は疑ない。Malpighi はその後 Grew の書をラテン語に訳し、又 Wallis 等と共に、Grew が肉眼で為した観察を顕微鏡で確めた。1673年には、前年学士会で発表した論文を 'an Idea of a Phytological History propounded, with a Continuation of the Anatomy of Vegetables, particularly prosecuted upon Roots. And an Account of the Vegetation of Roots chiefly grounded thereupon' として出版した (8vo ; folio 1682)。1672年4月、学士会の curator (for the anatomy of plants) となった。1675年、'The Comparative Anatomy of Trunks, with an account of their Vegetation grounded thereupon' を発行。一方、chemical papers を学士会で次々と発表した; 'Of the Nature Causes, and Power of Mixture' (1674年12月); 'a Discourse of the Diversities and Causes of Tasts chiefly in Plants' (1675年3月); 'an Essay of the

「植物解剖第一歩。それに基く植物性機能一般論を添ふ」

「植物学発達史私考 註 植物 (特に根) 解剖論篇。それに基く根の機能の記述を添ふ」
(成長)

「樹幹の比較解剖 註 それに基く根の機能の記述」

「混合の性質、原因及び力」
「主として植物における味の相違 (多様性) と原因について」
「植物において浸出塩の発見せられるさまざまの比率についての小論」

グルー (vegetable physiologist)

植物生理学者。一六四一年ケンブリッジの Pembroke Hall を卒業。一六六四年「植物と動物とは同一植物学によって創られたものである事を述べ、それら構造の類似を植論」である植物解剖学の研究を始めた。一六七〇年それに関する論文をまとめたが、それが Bishop Wilkins によって英国学士院で発表された。彼は小型顕微鏡を使用した最初の人物の一人である。その一年後 M.D. の学位を得た。

論文は 'The Anatomy of Vegetables begun, With a General Account of Vegetation grounded thereon' と題され、これが Marcello Malpighi による同様な研究に先んじたものであった。一六七一年には 'An Idea of a Phytological History propounded, with a Continuation of the Anatomy of Vegetables, particularly prosecuted upon Roots. And an Account of the Vegetation of Roots chiefly grounded thereupon' と題する論文を

発表した。一六七二年 'The Comparative Anatomy of Trunks, with an account of their Vegetation grounded thereupon' を発行。上記の論文を含む次の論文を発表した：'Of the Nature, Causes, and Power of Mixture' (1674); 'a Discourse of the Diversities and Causes of Tasts chiefly in Plants' (1675); 'An Essay of the Various Proportions wherein the Lixivial Salt is found in Plants' (1676); 'Experiments in consort of the Luctation arising from the Affusion of several Menstruums upon all sorts of Bodies' (1676); 'a Discourse concerning the Essential and Marine Salts of Plants' (1676); 'Experiments in consort upon the Solution of Salts in Water' (1677); 'a Discourse of the Colours of Plants (1677)' 一六七八—七四年に 'The Anatomy of Leaves,

挿入文書

挿入文書

—帝國主義研究—

明二六生　東大法學部卒
歷　現職　東大經濟部教授
略　著書　植民及植民政策
　　南洋群島の研究
著者　帝國主義研究
　　日本の傷を醫す者

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢内原忠雄

東京都千代田區神田神保町三ノ二
發行者　增永要吉

東京都千代田區九段二丁目一
印刷者　保科清華

發行所　株式會社　白日書院
東京都千代田區神田神保町三ノ二
電話九段四三五八番

本製用紙・扉印刷株式會社印刷工業株式會社印刷工業日本印刷

—帝國主義研究—

明二六生　東大法學部卒
歷　現職　東大經濟部教授
略　著書　植民及植民政策
　　南洋群島の研究
著者　帝國主義研究
　　日本の傷を醫す者

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢内原忠雄

東京都千代田區神田神保町三ノ二
發行者　增永要吉

東京都千代田區九段二丁目一
印刷者　保科清華

發行所　株式會社　白日書院
東京都千代田區神田神保町三ノ二
電話九段四三五八番

本製用紙・扉印刷株式會社印刷工業株式會社印刷工業日本印刷

Flowers, and Fruits' の論文（女版は一六六二年、一六七四年）'The Comparative Anatomy of Stomachs and Guts begun' など動物解剖学に貢献（女版は一六八一年）。一六七七年学会誌の書記官となり翌年一月から一六七九年二月迄 'Philosophical Transactions' も編輯―。一六八一年 'Museum Regalis Societatis, or a Catalogue and Description of the Natural and Artificial Rarities ... preserved at Gresham College' を発行。一六八二年には大著 'The Anatomy of Plants' が女版さる。四章から成り一―三章はそれぞれ 'The Anatomy begun', 'The Anatomy of Roots', 'The Anatomy of Trunks' を扱い、四章は 'The Anatomy of Leaves, Flowers, Fruits, and Seeds' で、その内容には胚珠と種子の区別、gooseberry の種子の胚の発芽、幼根、幹の維管束の枝の構造、つまり植物とはもみじの葉の乳液導管、茎の中に、ふくまれる葉、

表面をもし内部の crystals' 勃然 minute flowers の構造、雄ずい及び花粉等の組織が明瞭に示されている。植物の性の存在は最初に決定的に証明されたものとして、'Anatomy of Plants' は植物学の歴史上重要な書物である。

'New Experiments and Useful Observations concerning Sea-water made fresh according to the Patentee's Invention' について、ニンフントも発行。ラテン語で十版も重ね、伊語も版もだ。一六九四年 'Tractatus de salis cathartici amari in aquis Ebeshamensibus ... natura et usu' が女版された。彼の最後の著作 'Cosmologia Sacra, or a Discourse of the Universe, as it is the Creature and Kingdom of God' は一六九八年版二十二頁にわたる大著で、一七〇一年発行された。彼はその中で、神の性質とその存在の必然論のそれと主として人間論的立場から演繹的に論証しようとしたものであって、人間論的立場からではあるが、驚異は神学にも及ぶ点にある。

挿入文書

——帝國主義研究——

歷略者著

明二六生 東大法學部卒
現職 東大經濟學部教授
著書 植民及植民政策
南洋諸島の研究
帝國主義研究
日本の傷を探す者

會員番號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行
昭和二十四年六月一日 第二刷發行

定價二百五十圓

著者 矢內原忠雄
發行者 增永要吉
印刷者 保科清泰
發行所 東京都千代田區神田神保町三ノ二 株式會社 白日書院 電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

——帝國主義研究——

歷略者著

明二六生 東大法學部卒
現職 東大經濟學部教授
著書 植民及植民政策
南洋諸島の研究
帝國主義研究
日本の傷を探す者

會員番號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行
昭和二十四年六月一日 第二刷發行

定價二百五十圓

著者 矢內原忠雄
發行者 增永要吉
印刷者 保科清泰
發行所 東京都千代田區神田神保町三ノ二 株式會社 白日書院 電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

挿入文書

Various Proportions wherein the Lixivial Salt is found in Plants' (1676年3月); 'Experiments in consort of the Luctation arising from the affusion of several Menstruums upon all sorts of Bodies' (1676年4月及び6月); 'A Discourse concerning the Essential and Marine Salts of Plants' (1676年12月); 'Experiments in consort upon the Solution of Salts in Water' (1677年1月); 及び 'a Discourse of the Colours of Plants' (1677年5月)。1676－7年に、'The Anatomy of Leaves, Flowers, and Fruits' を発表(出版は1682年)。1676年 'The Comparative Anatomy of Stomachs and Guts begun' を以て animal anatomy に寄与(出版は1681年)。1677年学士会の secretary となり、翌年1月から1679年2月迄、'Philosophical Transactions' を編輯した。1681年, 'Museum Regalis Societatis, or a Catalogue and Description of the Natural and Artificial Rarities ... preserved at Gresham College' (folio. 386頁)を発行。1682年には大著 'The Anatomy of Plants' が出版された。四書より成り一～三書はそれぞれ 'The Anatomy begun', 'The Anatomy of Roots', 'The Anatomy of Trunks' の第二版。第四書は 'The Anatomy of Leaves, Flowers, Fruits, and Seeds' (72頁 42 plates)で、その plates には、ovule と seed の coats, goose-berry の種の pulpy coat, 胚種の cotyledons, plumule 及び radicle, 葉柄の vascular bundles, 松の resin-ducts, vine と sumach の latex-vessels, 芽の中でたたまれてある葉, 表面の hairs と内部の crystals, 菊科の minute flowers の構造, 雄蕊, 及び pollen-grains 等の組織が明瞭に示されてある。植物の性の存在を最初に認めた功績は彼のものと云ってよいだろう。著作によい翻訳者を得ず。'The Anatomy begun' は1675年 Le Vasseur が仏訳し、the

「数種の溶媒を(剤)すべての種類の体に注ぐ際に起る(又意に基く激動に関する実験」
「植物に於ける精塩と食塩についての論文」

「水中に於ける塩の溶解に関する実験」
「植物の色彩論」
「葉と花と果実の解剖」
「胃及腸の比較解剖第一歩(書)」

ロンドン王立学会会報
「Royal Society(王立学会)の博物館, 或は, Gresham College に保存せられる……天然並人工の珍品の目録及び解説」

'Anatomy of Plants' のはじめの三書はドイツでラテン語に訳されたが悪訳である。1684年，ラテン語及び英語で，'New Experiments and Useful Observations concerning Sea-water made fresh according to the Patentee's Invention' についての pamphlet を発行，立ば忽ち英語で10版を重ね，仏，伊語の版も出た。1695年 'Tractatus de salis cathartici amari in aquis Ebeshamensibus ... natura et usu' が出版された。彼の最後の著作 'Cosmologia Sacra, or a Discourse of the Universe, as it is the Creature and Kingdom of God' は 372 folio pages にわたる大著で 1701年発行された。彼はその中で，神の性質とその存在の必然性及びその創造物から a priori 及び a posteriori に演繹して，議論の矛先を主として Spinoza に向けてゐる。その a posteriori の argument は，much-borrowed astronomical learning を以て始められてゐるが，著者は神学にも充分通じてゐた人であった。 (D. N. B.)

「特許権所有者の創案に従つて淡水化された海水に関し為された新しい実験並有益な観察」

「Epsom (英国 Surrey州の町) の温泉に含まれる苦い下剤 (吐瀉剤?) の性質並便益」 (瀉利塩のことか?)

「聖宇宙論，或は，神の創造物且王国なる宇宙の論述」

1666? (D.N.B.)

51. Harris, John, 1667? — 1719.

scientific writer, divine, and topographer. 1684 — 1688年に Oxford の Trinity College の scholar であった。聖職につき、Sussex の Ickleshamの vicar に推された。1690年9月, Bishop of Chichester の special order により Winchelsea の牧師に任ぜられ、1690－1年2月, Winchelsea の St. Thomas 教会の rector になった。Sir William Cowper (後の lord chancellor) の chaplain に任ぜられ、Rochester の cathedral に prebend を与えられて 1707－8年2月就任、又、London の St. Mildred, Bread Street 及び St. Margaret Moses の聯合教会に推薦された。1711年 Strood (Kent) の perpetual curacy を与えられ、1715年 East Barming (Kent) の rectory に推薦された。St. Mildred の lecturer, Rev. Charles Humphreys は彼を厳しく追及し、嘲弄して 'The Picture of a High-flying Clergyman' (London, 1716) を出版した。

年少の時代より科学の研究を好み、1696年には the Royal Society の fellow に選ばれた。二年後には St. Paul's Cathedral で Boyle lectures を講じた。1699年 Cambridge で B.D. の学位を得、1706年には the Lambeth degree of D.D. を得た。1698年頃から Birchin Lane の Marine Coffee House に於て、mathematics の公開講義を始めた (1702年, 1704年には彼の講義は商賃いてみた)。1702年には、自宅でも あらゆる種類の mathematics を教授した。1706年には Royal Society の council の member であり、1709年には secretary に選ばれ、又、短期間 vice-president をつとめたらしい。彼は London booksellers の依頼で a 'Collection of Voyages and Travels' を編んだ (之は後、Dr. John Campbell が improve した)。又、同様彼等の提案により、最初の English 'Dictionary of Arts and Sciences' を作った (之はその後の cyclopedia

ハリス、ジョン

牧会者、数学者、神学者、地誌学者。

Oxford の Trinity College に学び学士となった。聖職につき、Sussex の Ickleshamの (代理牧師) vicar に推された。1690年 Winchelsea の牧師、翌年 Winchelsea の St. Thomas 教会の rector に任ぜられた。後の大法官 Sir William Cowper の礼拝堂牧師となり Rochester の聖会議員に1707－8年2月就任。ロンドンの St. Mildred, Bread Street 及び St. Margaret Moses の聯合教会に推薦された。1711年 Strood (Kent) の終身牧師の職を与えられ、1715年には East Barming (Kent) の教区牧師に推された。

牧会のかたわら科学の研究も怠らず、1696年には王立協会の特別会員に選ばれた。二年後には St. Paul's Cathedral で Boyle lectures を講じた。1699年 D.D. (Lambeth degree) を得た。1698年頃から Birchin Lane の Marine Coffee House に於て数学の公開講義を始めた。王立協会の評議員、事務局員となり又副会長をつとめたこともある。ロンドンの書籍の

1666? (D.N.B.)

51. Harris, John, 1667? — 1719.

scientific writer, divine, and topographer. 1684 — 1688年に Oxford の Trinity College の scholar であった。聖職につき、Sussex の Ickles-ham の vicar に推された。1690年9月, Bishop of Chichester の special order により Winchelsea の牧師に任ぜられ、1690—1年2月, Winchelsea の St. Thomas 教会の rector になった。Sir William Cowper (後の lord chancellor) の chaplain に任ぜられ、Rochester の cathedral に prebend を与へられて 1707—8年2月就任、又、London の St. Mildred, Bread Street 及び St. Margaret Moses の聯合教会に推薦された。1711年 Strood (Kent) の perpetual curacy を与へられ、1715年 East Barming (Kent) の rectory に推薦された。St. Mildred の lecturer, Rev. Charles Humphreys は彼を厳しく追窮し、嘲弄して 'The Picture of a High-flying Clergyman' (London, 1716) を出版した。

年少の時代より科学の研究を好み、1696年には the Royal Society の fellow に選ばれた。二年後には St. Paul's Cathedral で Boyle lectures を講じた。1699年 Cambridge で B.D. の学位を得、1706年には the Lambeth degree of D.D. を得た。1698年頃から Birchin Lane の Marine Coffee House に於て、mathematics の公開講義を始めた (1702年, 1704年には彼の講義は商売いであった)。1702年には、自宅でも あらゆる種類の mathematics を教授した。1706年には Royal Society の council の member であり、1709年には secretary に選ばれ、又、短期間 vice-president もつとめたらしい。彼は London booksellers の依頼で a 'Collection of Voyages and Travels' を編んだ (之は後、Dr. John Campbell が improve した)。又、同様彼等の提案により、最初の English 'Dictionary of Arts and Sciences' を作った (之はその後の cyclopedia

「海陸紀行集」

「学芸辞典」

ハリス ジョン

牧師 著述家 神学者 地誌学者。

Oxford の Trinity College に修業したが学位は取らなかった。卒業後 Sussex の Icklesham の(代理牧師)に推されたが 1700 年 Winchelsea の牧師、翌年 Winchelsea の St. Thomas 教会の rector に任ぜられた。後の大法官 Sir William Cowper の礼拝堂牧師となり Rochester の僧侶議員に 1702-18 年に目録作成。又ロンドンの St. Mildred, Bread Street 及び St. Margaret Moses の聖堂教区に推薦された。1711 年 Strood (Kent) の教会牧師補の職を與えられ 1721 年には East Barming (Kent) の教区牧師に推された。

幾何学と一般学の研究もあり 1698 年には英国学士院の特別会員に選ばれた。同年後には St. Paul's Cathedral で Boyle lectures を講じた。1707 年 D.D. (Lambeth degree) を得た。1708 年頃から Birchin Lane の Marine Coffee House において数学の公開講義を始めた。英国学士院の評議員、書記長となり又統計同僚会員ともつとめた。ロンドンの自宅で

ハリス 2

依頼で a 'Collection of Voyages and Travels' を編集し又最初の辞書 'Dictionary of Arts and Sciences' を作った。

著作は 1. 'Remarks on some late Papers relating to the Universal Deluge, and to the Natural History of the Earth', 1697.

2. 'The Atheistical Objections against the Being of God, and his attributes, fairly considered and fully refuted' (1698 年の Boyle lectures)

3. 'Short but yet plain Elements of Geometry and Plane Trigonometry', 1701, (Ignace Gaston Pardies の仏文から)

4. 'The description and uses of the Celestial and Terrestrial Globes, and of Collins's Pocket Quadrant', 1703.

5. 'Lexicon Technicum; or an Universal English Dictionary of Arts and Sciences, explaining not only the terms of Art, but

挿入文書

—帝國主義研究—

歷略者著

明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
　　南洋群島の研究
　　帝國主義研究
　　日本の傷を醫す者

矢内原忠雄

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

會員番號　A 208006

著者　矢内原忠雄
發行者　東京都千代田區神田神保町三ノ二　增永寅吉
印刷者　東京都千代田區九段二丁目一　保科清春
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院
電話九段四三五八番

本製川桂・刷印刷工業株式會社印刷日本

—帝國主義研究—

歷略者著

明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
　　南洋群島の研究
　　帝國主義研究
　　日本の傷を醫す者

矢内原忠雄

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢内原忠雄
發行者　東京都千代田區神田神保町三ノ二　增永寅吉
印刷者　東京都千代田區九段二丁目一　保科清春
發行所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　株式會社　白日書院
電話九段四三五八番

本製川桂・刷印刷工業株式會社印刷日本

挿入文書

the Arts themselves', 1704.

6. 'Navigantium atque Itinerantium Bibliotheca: or a compleat Collection of Voyages and Travels, consisting of above four hundred of the most authentick writers', 1705.

7. 'The London Merchant's Mirror, or the Tradesman's Guide, being Tables for the ready casting up Bills of Exchange', 1705.

8. 'The British Hero; or a discourse shewing that it is the interest, as well as duty, of every Briton to avow his loyalty to King George on the present important crisis of affairs', 説教. 1715.

9. 'The Wickedness of the pretence of Treason and Rebellion for God's sake', 説教. 1715.

10. 'Astronomical Dialogues between a Gentleman and a Lady: wherein the Doctrine of the Sphere, uses of the Globes, and the Elements of Astronomy and Geography are explained. With a description of the Orrery', 1719.

11. 'The History of Kent, in five parts', 1719, 一巻のみ出版。非常に不正確。

挿入文書

—帝國主義研究—

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢内原忠雄
東京都千代田區神田神保町三ノ二

發行者　增永要吉
東京都千代田區九段三丁目一

印刷者　保科清春
東京都千代田區神田神保町三ノ二

發行所　株式會社　白日書院
電話九段四三五八番

會員番號　A 208006

本誌川村・印刷社會式株工業印刷日本印刷

歷略著者

周二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
植民及植民政策
著書
南洋群島の研究
帝國主義研究
日本の使命
經す者

挿入文書

のもととなってある)。1712年, a 'History of Kent' の資料を集め始めた(之は彼の死後、大して価値のない一巻が發行されたのみ)。
著作は、1. 'Remarks on some late Papers relating to the Universal Deluge, and to the Natural History of the Earth', London, 1697, 8vo. 2. 'The Atheistical Objections against the Being of God, and his Attributes, fairly considered and fully refuted', (1698年の Boyle lectures) 3. 'Short but yet plain Elements of Geometry and Plane Trigonometry', 1701, from the French of Ignace Gaston Pardies. 4. 'The description and uses of the Celestial and Terrestrial Globes, and of Collins's Pocket Quadrant', London, 1703, 8vo. 5. 'Lexicon Technicum; or an Universal English Dictionary of Arts and Sciences, explaining not only the terms of art, but the arts themselves', 1 vol. London, 1704; 2nd edit., 2 vols. 1708–10. 6. 'Navigantium atque Itinerantium Bibliotheca: or a compleat Collection of Voyages and Travels, consisting of above four hundred of the most authentick writers', 2 vols., London, 1705, fol. Another edition, revised, with large additions, by Dr. John Campbell, 2 vols., 1744–8, fol., and again, 2 vols. 1764, fol. 7. 'The London Merchant's Mirror, or the Tradesman's Guide, being Tables for the ready casting up Bills of Exchange', London, 1705, a small sheet composed and engraved by Harris. 8. 'The British Hero; or a discourse shewing that it is the interest, as well as duty, of every Briton to avow his loyalty to King George on the present important crisis of affairs,' a sermon, London, 1715, 8vo.

「ケントの「史」」

「全世界の大洪水及び地球の博物学に関する最近の論文若干の短評」
「神の存在並属性に対する無神論的異論の公正な考察と完全な弁駁」
「幾何学及び平面三角法の簡明な要綱」(訳)

「天球儀と地球儀, 及び Collins の小型(象限)円分儀の説明と用途」
「技藝辞典; 或は 学術(学)技藝全般の英語辞典 術語のみならず 各の技藝自体をも解説す」

「航海旅行文庫; 海陸紀行の完全な蒐集, 最も信憑すべき著者によるもの四百余篇より成る」

「ロンドン商人の便覧; 或は為替手形計算表」(単)

「ブリテンの英雄; 現下の重大な危機にあたりジョージ王に忠誠を誓う事は すべてのブリテン人にとって義務なると 公共に利益なる事を示す講話」

9. 'The Wickedness of the pretence of Treason and Rebellion for God's sake,' a sermon, London, 1715, 8vo. 10. 'Astronomical Dialogues between a Gentleman and a Lady: wherein the Doctrine of the Sphere, uses of the Globes, and the Elements of Astronomy and Geography are explained. With a description of the Orrery,' London, 1719, 8vo, 2nd and 3rd editions, corrected by J. Gordon, 1729 and 1766. 11. 'The History of Kent, in five parts,' vol. i. (all published), London, 1719, fol. (extremely inaccurate).

(D. N. B.)

「叛逆及暴動を神にことよせる事の不法さ」

「一人の紳士と婦人の間に交された天文学上の対話：その中に於て天球の学理，天地球儀の効用並天文・地理の要綱を解説，オーテリ(仮称系儀)の説明を添ふ」

「ケントの歴史」

52. Hoole, John, 1727—1803.

Hoole は父親の monument. 父は牧師・moralist・miscellaneous writer。

Moral philosophy grammar school 及び St. Mary Hall, Oxford 出身。1728年 B.A.に、1731年 M.A.になった。ライス氏校長の下で Horace, Virgil, Cicero, Terence, Ovid, Tibullus, Juvenal, Persius, Phaedrus, Lucan, Statius, Claudian, Quintilian, Pliny, Seneca, Tacitus, Suetonius, Florus, Eutropius, Sallust, Caesar, Justin, Valerius Maximus, Curtius, Velleius Paterculus, Aurelius Victor, Eutrop, Sulpicius Severus, Paterculus, Lucretius, Manilius, Phaedrus, Ausonius, Claudian, Boethius, Prudentius, Tibullus, Propertius, Ovid, Juvenal, Persius, Lucan, Statius, Valerius Flaccus, Silius Italicus, Martial, Terence, Plautus, Virgil, Horace, Cicero

52. Harte, Walter, 1709－1774.

miscellaneous writer。父は牧師・nonjuror。
Marlborough grammar school 及び St. Mary Hall, Oxford で教育され、1728年 B.A. に、1731年 M.A. になった。予約出版で 'Poems on several Occasions' (London, printed for Bernard Lintot, 8vo, 1727) を発表した。その中の Pope 頌讃の詩は、詩人(Pope)の作品集の巻頭に幾度か掲げられてある。Pope と Harte は後 great friends になった。1730年、'Essay on Satire, particularly the Dunciad' (in verse), 8vo, が発行された。Mr. Elwin は '褒讃が阿諛に近い' と評してある。1735年、匿名で an 'Essay on Reason' (folio) を発表。それは、(Elwin によれば) Pope が校閲したといはれ、the 'Essay on Man' a close but tame imitation である。1737年2月、Oxford 大学で 'The Union and Harmony of Reason, Morality, and Revealed Religion' という sermon をしたが、注目をひき、忽ち五版を重ねた。その中に箇處 Socinianism 的だと非難されたところがあり Harte はそれらを撤回した。当時彼は Gosfield (Essex) の vicar であった。その後 St. Mary Hall の vice-principal に仕せられ、tutor として信望を得た。1745年、Lyttelton の推挙で、Mr. Stanhope (Earl of Chesterfield の natural son) の travelling tutor となった。しかし彼は Greek, Latin, German law 及び Gothic erudition を好んで他にはあまり関心なく、又長年 college life に慣れて awkward な彼は、優雅なしつかうするには向かなかった (Maty, Life of Chesterfield)。四年の後彼は pupil をパリに残して英国に帰った。1750年、Chesterfield の intervention により、Windsor の canon に仕せられ、又多分 Port Eliot の Eliot 家の influence で、Cornwall の St. Austell

「詩集，さまざまの機会に」

「風刺詩論，特に Dunciad について」

「理性論」

「理性と道徳性と啓示宗教の一致と調和」

ハートフォードの名ある旅行に附いて tutor
をつとめた。ギリシャ、ラテンの古典
はもちろん、数学、哲学、神学、
歴史、地理、天文、物理、
それに現代語では仏語、伊語、
独語、ヘブライ語、更に
Windsor の牧会職、次に Cornwall の St.
Austell と St. Blazey の聖職禄に推薦された。
一七五九年 'History of the Life of Gustavus
Adolphus, King of Sweden, sirnamed the
Great' が発行された。これは数年を費して
集めた多くの資料を基礎にした
ものである。ヨークシャーにいたころ
から、ローマ史も勉強したらしい。
~~Dr. Johnson が彼を評して、その著作は~~
~~人々を惹きつけるが、その著作は~~
一七六四年に出版された 'Essays on Husband-
ry' は魅力のある有益な書物で、ジョンソン
も称賛したほどである。ヨークシャーにも子供も
はあるが。Arthur Young が、ハートの
ために特筆大書をその書の中で誌している
――「彼の農耕に関する論説は、頗る富み

著述家。父は教区牧師。
Oxford の St. Mary Hall に学び、一七三一年 M.A.
になった。一七二七年、予約出版で 'Poems on
several Occasions' を発表、その中の Pope
の詩はポープの作品集の巻頭に掲載されるほどの
ものであった。彼はその後ポープと大変親しく
なり、一七三〇年には 'Essay on Satire, particular-
ly the Dunciad' (匿名)が発行された。
一七三五年匿名で発表した an 'Essay on
Reason' は (Edwin によれば) ポープの校閲
を経たもので、ポープの the 'Essay on Man' の
先駆をなす一つの特筆すべき模倣である。
一七三七年に Oxford で行った 'The
Union and Harmony of Reason, Morality,
and Revealed Religion' という説教は注目を
ひきおこした。当時彼は Gosfield
(Essex) の vicar 補であったが、その後 St.
Mary Hall の副学寮長にえらばれ、
tutor という役を得た。一七四五年ニュー

挿入文書

會員號碼 A 208006

帝國主義研究

著者略歷
著書 明治大正史
日本帝國主義及滿洲に於ける列國の利害關係
太平洋問題
支那問題の基本的研究
等あり

發行所
株式會社 白日書院
東京都千代田區三崎町二ノ九
電話九段(33)五六〇番

印刷 昭和十三年四月廿五日
發行 昭和十三年四月廿八日 第一回發行
著者 矢内原忠雄
東京都千代田區三崎町二ノ九
株式會社 白日書院
代表者 清水泰二

昭和十三年六月一日 第二回發行
定價二百五十圓

日本印刷工業株式會社印刷・佳川製本

帝國主義研究
矢内原忠雄

挿入文書

二一ト 3.

風に光彩ニ、存るまかつまの元旅ら様
ですよ。人間に因すルル祝ル嘆舎ナヘ
ナ、ニ深ニ共ニ、又角度ですよ。」

Bath ニ通ヲ神ロセーがらら、The Amaranth, or Religious Poems, consisting of Fables, Visions, Emblems, &c., 1767. ヒ本ニ。

Horace Walpole ハ ニ一ト ヒ評ニ
「ホーラの愛者ラ。姉ルえ彩よりも不明ル
面魔ヒ横彼ニ、ヒろこみ。

挿入文書

挿入文書

—帝國主義研究—

歷　明二六生　東大法學部卒
歷　現職　東大經濟學部教授
略　著書　植民及植民政策
者　南洋群島の研究
著　帝國主義研究
著　日本の佛を訪ふ者

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢内原忠雄
東京都千代田區神田錦町三ノ二
發行者　增永要吉
東京都千代田區九段二丁目一
印刷者　保科清華

發行所　東京都千代田區神田錦町三ノ二　株式會社　白日書院　電話九段四三五八番

會員番號　A 208006

日本印刷工業株式會社印刷・增川製本

と St. Blazey の crown living に推薦された。1759年, 'History of the Life of Gustavus Adolphus, King of Sweden, sirnamed the Great' London, two vols., 4to, が発行された。之は数年を費した労作ろく、research と information の著作であるが、Chesterfield は、'その文体は全くひどい。Latinisms, Gallicisms, Germanisms その他の isms にみちてゐて Anglicisms はない。或箇處では物々しく、他の箇處では卑俗である' と評し、Carlyle はそれを a 'wilderness' とよんでゐる。翌年独訳された。Lord Eliot (彼の pupil であった人) は '独訳ではよい本である' とゐってゐる。Dr. Johnson は、Harte を、scholar として又人づきのよい人として推賞し、その History の欠陥は imbecility よりでなく, foppery より出でたものだ、とゐってゐる。1764年 'Essays on Husbandry' を出版 (改訂増補された第二版は1770年に出た)。之は a charming and valuable work であり、Johnson も好著とみとめ、Chesterfield も style をほめてゐる。Arthur Young は Harte を訪ねた時の印象をその著の中で語ってゐる——'彼の Husbandry に関する談話は、経驗に富み真に充実して、本当の生れつきの紳士の様である, 人間に関する広汎な知識と嘆賞すべき仁愛とは、快く又有益である'。 Bath に退いて病をやしなひながら 'The Amaranth, or Religious Poems, consisting of Fables, Visions, Emblems', &c., London, 1767, 8vo. を書いた。

Horace Walpole は Harte を評して、'Pope の愛弟子, 師の lustre よりむしろ obscurity を模倣した', とゐってゐる。

(D. N. B.)

「スエーデン王大グスタフ・アドルフの傳記」

「農耕論」

「不凋花；或は寓話, 幻想, 象徴より成る宗教詩集」

54. Hamelot de Montauville, Barthélemy de, 1625 — 1695.

Jesuit casuist. 1671 年に in-12 で出版。

Collège de Jyonne で D'Auvergne の後を継ぐ。1691 年没。

書名は Bibliothèque orientale, ou dictionnaire universel contenant tout ce qui regarde la connoissance des peuples de l'Orient で、1697 年 A. Galland により死後出版。これは Hadji Khalfa の Lexicon bibliographicum et encyclopaedicum の仏訳。

Hottinger, Johann Heinrich, 1620 — 1667.

Orientalist. Zürich 生れ。1642 年 Heidelberg 大学に学んだが、1643 年 Holsteinius 及び Allatius と知合った。一年ほどフランスに滞在の後、Tuscany 大公 Ferdinand II から多くの東洋書を購入するため Leo D'Allatius と共にローマに派遣された。ローマ滞在中 Vatican 図書館の東洋書籍の調査に従事し、1644 年 Peiresc の死後 Peiresc 家の東洋書籍の整理に従事した。1647 年 Fouquet の家に迎えられ、1648 年 Mazarin 枢機卿の図書館の東洋書籍の整理に従事した。1655 年 Heidelberg 大学に東洋語学教授として招かれ、1661 年 Younguet と共に 1500 Arabs と称された。1661 年 Younguet と共に Arabic, Persian, Turkish and Latin Dictionary を著わした。

(E. B.)

54. Herbelot de Molainville, Barthélemy d', 1625 — 1695.

French orientalist。パリ生れ。the university of Paris に学び、oriental languages の研究を志して、Italy に行き、諸港に出入する東洋人と親しんでその研鑽に努めた。此處で彼は亦 Holstenius (the Dutch humanist, 1596 — 1661) 及び Leo Allatius (the Greek scholar, 1586 — 1669) と知合った。一年半でフランスに帰り、Fouquet (superintendent of finance) の家に迎へられ、年金 1500 livres を與へられた。1661年 Fouquet と仲たがひして之を失ひ、王の secretary and interpreter of Eastern languages に任命された。二、三年後再び Italy を訪れた。Tuscany の大公 Ferdinand II は多くの貴重な Oriental MSS. を彼に贈り、その court に留めようとしたが、彼は Colbert によってフランスに呼戻され、王から年金を受けた。1692年、the Collège de France で、D'Auvergne の後を継いで Syriac の講座を擔任した。パリで歿。

主著は Bibliothèque orientale, ou dictionnaire universel contenant tout ce qui regarde la connoissance des peuples de l'Orient で、殆ど全生涯を費した大作、1697年 A. Galland によって完成された。之は Hadji Khalfa の尨大な arabic dictionary に基き、大部分その抄訳であるが、その外に、莫大な数に上る他の arabic and Turkish compilations and manuscripts の substance をも收めてある。

この書は Maestricht (fol. 1776) 及び Hague (4 vols. 4to, 1777 — 1779) で再版された。その他の著作は、Oriental Anthology 及び Arabic, Persian, Turkish and Latin Dictionary があるが、何れも出版されてゐない。

(E. B.)

フランスの東洋学者。パリ大学に学んだが、東洋言語の研究をたしてイタリーに行き、諸侯にも入り東洋人情を視んでその研究に努めた。その間にオランダヒーマニスト Holsteinius 及びギリシャ学者 Leo Allatius と知合った。一年ぶりでフランスに帰り財務官 Fouquet の家に迎えられ年金をも受けたが一六六一年 disgrace に陥ったので東洋言語の通訳官並書記に任ぜられ、ここに二三年住んでイタリーも訪れ、Tuscany 大公 Ferdinand II から多くの貴重な東洋の写本を贈られその地に留まらんことを懇請されたが断ってフランスに帰り年金を受けた。一九三年国立東洋学校で D'Auvergne の後を継いでシリア語の講座を担任した。

その著は Bibliothèque orientale, ou dictionnaire universel contenant tout ce qui regarde la connoissance des peuples de l'Orient で始ど全世界を尽した大作で一九七年 A. Galland によって完成された。之は Hadji Khalfa

の如きアラビヤ語辞典に基き大部分その抄訳であるが、その他に莫大な数に上るアラビヤ及びトルコの編集物及自身の著書をも吐出してみる。

その他に Oriental Anthology (東洋詩華集) 及び Arabic, Persian, Turkish and Latin Dictionary (アラビア・ペルシヤ・トルコ・ラテン語字典) をも編んだが、これらも抜萃してみた。

挿入文書

—帝國主義研究—

歷略　明二六生　東大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
　　南洋諸島の研究
　　帝國主義研究・
著者　日本の使を經す者

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢内原忠雄
東京都千代田區神田神保町三ノ二
發行者　增永寅吉
東京都千代田區九段二丁目一
印刷者　保科清泰
發行所　株式會社　白日書院
東京都千代田區神田神保町三ノ二
電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

—帝國主義研究—

歷略　明二六生　重大法學部卒
現職　東大經濟學部教授
著書　植民及植民政策
　　南洋諸島の研究
　　帝國主義研究
著者　日本の使を經す者

會員番號　A 208006

昭和二十三年四月一日　第一刷發行
昭和二十四年六月一日　第二刷發行

定價二百五十圓

著者　矢内原忠雄
東京都千代田區神田神保町三ノ二
發行者　增永寅吉
東京都千代田區九段二丁目一
印刷者　保科清泰
發行所　株式會社　白日書院
東京都千代田區神田神保町三ノ二
電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

挿入文書